求道

第九卷
第四號

明治四十五年七月二十日發行第九卷第四號
毎月一回二十日發行

求道第九卷第四號目次

求道

◎大信海　講話　近角常觀

◎歸命の一念　告白　近角常觀

◎懺悔　さかえ

◎感謝の紀念　原基

◎親ごゝろ　堀勇吉

◎信仰書簡　一老人

雜錄

◎處女操行の淵源　近角常觀

時報

◎第二回夏季求道會

講話

毎日曜午前九時　求道學舍《本郷區森川町一番地》

毎土曜午後二時　第二求道會《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午後七時　第三求道會《日本橋蠣殼町説教所》

夏季中休講す

求道　第九卷第四號

大信海

親鸞聖人信卷に曰く、凡そ大信海を案ずれば貴賤緇素を簡ばず、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、正觀に非ず、邪觀に非ず、有念に非ず、無念に非ず、尋常に非ず、臨終に非ず、多念に非ず、一念に非ず、唯是れ不可思議、不可稱、不可説、の信樂也、喩へば阿伽陀藥の一切の毒を滅するが如し、如來の誓願の藥は能く智愚の毒を滅する也と、嗚呼實に廣大不思議の大信海である、如來の御慈悲をいたゞくには貴賤の區別なく僧俗の差等あるのではない、富貴なりと雖如來の大悲をいたゞかざれば何の詮もなく、貧賤なりと雖功德の寶をいたゞけばそれ程の幸福はない、堺の日向屋は三十萬貫をもたれ候へども死にたるが佛になり候はず、大和の了妙は帷一つ着かね候へども、此度佛になるよと仰せられ候、されば、とて富貴を邪魔にするに及ばず、貧賤を敢て誇とするにも當らない、田あれば田あることを憂へ、宅あれば宅あることを憂ふ、田なければ田なきことを憂へ、宅なければ宅なきことを憂ふ、あることを喜び、なきことを悲む、いづれも皆不可である、富貴に處しては富貴を行ひ、貧賤に處しては貧賤を行ふ、富貴にして御慈悲を喜ぶは幸福の幸福にして、貧ふして御慈悲を喜ぶは貧しきが却て喜の種となる、而して此御慈悲を喜ぶには男女老少の區別なく、一文不通の愚かなるものも大悲を聞く一念に踊躍歡喜して信に入り、如何なる高才碩德も如來大悲の前には尺寸の效をも認むることなく、實に法照禪師の偈は絶對他力信仰の淵源、選擇本願の根本義である、曰く

彼佛因中立二弘誓一　聞レ名念レ我總迎來
不レ簡二富貴將二貧窮一　不レ簡二下智與二高才一
不レ簡二多聞持二淨戒一　不レ簡二破戒罪根深一
但令二廻心多念佛一　能令二瓦礫一變成金

造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、實に大悲の御惠の前には皆善も惡も廻へして懺悔感謝するばかりである。

如來の誓願の藥は能く智愚の毒を滅す也の一句は、實に他力信仰の極處である、愚は固より毒である、同樣に智も亦毒で

ある、小智は菩提の妨、凡夫二乘の小智を以て佛智海を測るべきではない、惡も毒である、が善も亦毒である、何んとなれば我等の善とする所は他の惡とする所である、よしあしの文字をもしらぬ人はみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりかほは、おほそらことのかたちなり、是非しらぬ邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり、我等の善惡智愚亦何れも妨である、我等が小智を以て標準として是非取捨する所皆誤である、如來の智願海に遇ひぬれば如何なる罪惡と雖見捨てたまはぬ大慈大悲である、小慈小悲に安んずるものは如來の大慈大悲を疑ふものである、善惡の二つ總じてもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御こゝろによしとおぼしめすほどに、しりとほしたらはこそよきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそあしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、すべてのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそおほせは候ひしか、唯不可稱不可說不可思議の御慈悲ばかりがそらごと、たはごとまことなき我等を見捨てたまはぬ御まことである。

本願一實の大道は、十方衆生の我等を悲憫したまひて、不可思議兆載永劫の間、清淨眞實の御心を以て不實不淨の我等を倦まず撓まず、遂に大悲の親心の中に引き入れねばならぬとの誓である。唯此如來選擇願心の親心が有難い、思へば〳〵唯事ではない、何んとも申して見樣がない、思ひ計ることは出來ぬ、實に不可稱不可說不可思議である、之を以て行者の行や善の如く思ふは誤である、況んや我等が心に頓に悟るにもあらず、漸に修養するにもあらず、猶定善散善正觀邪觀有念無念の如き我等の心を以て或は盡き或は作られたるものにあらず、尋常でなければならぬと思ふも不可なれば、臨終でなければならぬと思ふも不可である、多念と執するも間違なれば、一念と執するも誤である、一念を以ては往生治定の時節と定めて其時の命のぶれば自然と多念に及ぶ道理である、一々行者のはからひを挾まねば非行非善である、然れども如來廻向の大慈大悲は實に不可稱不可說不可思議の大善大行大功德である。眞實の信心には必ず名號を具す、名號には必ずしも願力の信心を具せざるなり、念佛ですら行者のはからひをもて稱ふるなれば皆是れ定散自力の作りものである、作り花は如何に麗はしくても命がない、野邊の草花でも眞の花は生

きてある、殊勝にするは尊くもなし、彌陀の本願こそ殊勝なれ、尊む人よりも尊がる人こそ尊うとけれ、實に五逆十惡の凡夫罪惡深重煩惱熾盛の我等がために五劫永劫の御心を惱まし下されし御眞實唯不思議〳〵と仰ぎ奉るより外はなく、南無阿彌陀佛〳〵と稱へ奉るの他に仕方がない。

涅槃經に曰く、一道淸淨にして二あることなし、實に味ふべき金言である、今世動もすれば道は一のみと稱して、甲と乙とを合せんとし、丙と丁とを一ならじめんとす、これ皆各相對を並べ來りて絕對と稱せんとするものである、眞の絕對は唯の一である、甲てもあり乙であり得べきものでなく、實に二もあり三もあり得らるべきではない、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよき人の仰を蒙りて信ずる外に別の仔細はない、南無阿彌陀佛。

人世は愈となれば荒れはてたる茫々たる沙漠を旅行するが如くである、眞に無人空迥の澤である、一人の友もなく、眞實の同情者は見出すことが出來ぬ、たとひ親子兄弟の間柄と雖我が心中を理解して吳れるものはない、實に荒涼たる人生である、悲慘なる人生である、見渡すかぎり一もたよるべきものがない、此の如き場合に沙烟を立てゝ地平線の一角より猛惡なる獸類が猛り狂ひつゝ眞一文字に我方に進み來るのである、是は人生煩悶を極めて荒々しき心に驅られて我等が狂ひまはる有樣である、又他の一方よりは群賊劍戟を閃らめかして我を認めて襲ひ來るのである、是所謂山中の賊に非ずして心中の賊である、煩惱の六賊である、即ち外界の誘惑である、又他の一方よりは惡虫毒蛇が競ひ來るのである、是我等が平素は左程に思はねど、愈逆境となれば人を羨み人を嫉み人を呪ふ心を起して自ら苦む有樣である、貪瞋邪僞奸詐百端にして惡性止めがたし、事蛇蝎に同じとある實に我等が毒々しき心の有樣である、而して忽然として中路に橫はる水火の二河は即ち貪欲瞋恚である、愛心常に起て能く善心を染汚し、瞋嫌の心能く功德の法財を燒くに喩へたものである、實に四方八方皆塞がり來るのである、唯餘す所は水火中間に於ける四五寸の白道ばかりである、併頗る危險なる道である、水波常に道を濕し、火浪亦道を燒くのである、實に進退維谷まりて何んぞ共致方ないのである、亦今廻らば亦死せん、住らば亦死せん、去かば亦死せん一種として死を免れず、我寧ろ此道を尋ねて前に向て去かん、既に此道あり、必ず度り得べしと、是れ人生切迫窮窘を極めていよ〳〵道を求むるの念を萌した有樣であ

る、東の岸には人の棚むる聲をきく、仁者但決定して此道を尋ねて行け、必ず死の難なけん、若し住らば即ち死せんと、實に是れよき人の仰せである、眞の善知識の御教化である、釋尊既に滅したまひたれども眞實金言の儘を御教化下さる眞の知識に遇ひたてまつりた仕合である、此時恰も西岸上に人ありて喚で言く、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、衆へて水火の難に墮せんことを畏れざれと、實に是れ大悲招喚の御聲である、親鸞聖人は、西岸上に人ありて喚で言くとは阿彌陀如來の誓願也、汝の言は行者也、勤れ則ち必定の菩薩と名くと仰せられた、此如く身心何れも致方なく、煩悶懊惱死より外致方なき私の心底を徹鑒したまひて、汝と呼びかけたまふ御親は阿彌陀如來にてまします、一心正念にして直に來れ、ハイといたゞく一念、口にあらはるゝは南無阿彌陀佛、唯信ずるの外はない、信ぜずには居られない、直に來れとは如來の大願他力の儘、釋尊直說の儘、善知識の言の下に、歸命の一念開發して、我等が心の中に徹到して下さつた仰せである、我能く汝を護らんと、我とは盡十方無碍光如來也、不可思議光如來也と仰せられた、信心淸淨即見佛、御慈悲の聞こえた一念實に廣大無碍光明、難思不思議の親樣の疑はれぬやうになる、能の言は其疑はれぬやうになつた親心の深き極りである、實に如來の誓願の藥は、能く智愚の毒を滅すといふは此親心である、口には願力をたのみたてまつるといひて、心にはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふともさすがよからんものをこそたすけたまはんずれと思ふは、此樣な惡いものはたすからぬといふ人である、疑心の人である、佛の願深しと雖、いかでか此身をたすけたまはんと疑ふ人である、此思、まことに賢きに似たり、驕慢を起さず、貢高の心なし、しかはあれど佛の不可思議力を疑ふの過あり、佛如何ばかりの力ましますと知りてか罪惡の身なれば救はれがたしと思ふべき、如何な强剛難化の私も大慈大悲の親心の下には氷融けて水となり、鐵も變じて金となり、炭團の如き心中も全く變じて火の如き佛心となりて下さるのである、かく迄の親樣の御やる瀨なき御心とは知らずして、我身を善くせんと思ひしも、我身の價値を知らなんだのである、かくの如き罪業深重の身を持ちながら、猶立派になれるものゝ樣に思ふたのが却て高慢であつた、人の惡しきを咎むるの心は我身の惡しきを知らぬのであつた、如何に我身の惡しきといふことが初めて知られて見れば、世の中の如何なる罪業と雖救はれぬ筈はな

い、若し一點たりとも自分が善いと思ひ、善く出來ると思ひ、善くなりたいと思ふなれば、それは癖物である、他人が惡いと思ひ、自分は其樣なことはせぬと思ふならば、大に戒心すべきである、作るも作らざるも罪體なり、思ふも思はざるも妄念なり、今時の道俗誰か耳四郎に異らんやである、人が罵るとき人に誤解されたとき、誰しも不足に思ふであらろう、併如何なることでも我等にない罪惡はない、たとひ事實に於ては誤りとするも、我心に立入りて見ればやはり事實である、人の惡しきことは、やはり我心に潛める罪惡である、人の我に對する一擧一動は皆過去に覺えのあることである、知らして貰ふて見れば畢竟我身一つの罪惡である、我身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より以來常に沒し常に流轉して出離の緣あることなき身の上である、善くならんとしてなる能はず、惡しきを避けんとして避くるあたはず、進むも退くも道はない、しかるに大悲の親樣は、其善くなれないことを知ろしめし、其惡しき奥底を見透したまひて、大悲の御涙を注ぎたまひて、御見捨て下さらぬ親心を知らして貰ふて見れば、唯不思議〳〵と信じ奉るの外はない、彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひたつこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあつけしめたまふなり、護言は阿彌陀如來果成の正意を顯はす也、亦攝取不捨を形はす貌也、則是れ現生護念也。

十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば阿彌陀となづけたてまつる、阿彌陀如來とはかくの如き我身をたすけんとの思召よりあらはれたまひし御親にてまします、一念南無阿彌陀佛といたゞくとき、大悲の親樣は深く滿足したまひて、八萬四千の光明の中に攝取して下さるのである、世間にても如何にしても友人に我誠を知らせんと思ふとき、終に友人が我誠を理解して自己の誤解をあやまりはてゝ、感謝の意を述ぶるならば、必ずかく我本意を受けて、呉れゝば我は猶滿足に思ふ、却て此方より禮を言ひたいとの思である、阿彌陀佛の攝取不捨が是である、實に待ちかねたまふ親心である、金剛堅固の信心の、さたまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける、實に現生護念の利益を得るのである、現生十種の益、現世利益和讃の事實は、人生歷々として明かに獲らるゝのである。

發信稱名光攝護（シヨウ）　亦獲二現生無量德一

無邊難思光不レ斷。　更無レ隔二時處諸緣一

諸佛護念眞莫レ疑。　十方同稱讃（クン）悅可。

惡染逆惡齊皆生（クシ）。　謗法闡提廻（ヱシ）皆往。

講話

歸命の一念

『求道學會日曜講話』

近角常觀

一

今日の題は『歸命の一念』であります。御存知の方には申す迄も無いのでありますけれど、未だ他力信心の話をお聞きの無い方の爲めに申すならば、歸命とは南無の二字を翻譯したのが歸命である、南無の梵語を翻譯すれば、歸命となるのであります。其の歸命の一念とは、即ち無量壽如來の命に歸する、如來の命令に歸するといふ事で、言ひ換へれば、佛にすがる一念といふ事になるのであります。一念とは、佛のお慈悲を聞かせて貰つて、其の遣る瀬無き如來の大悲が、初めて心中に屆いて下された、其の一念である。で以下順次お話するのではありますけれど、信心と申して外にあるのでは無い、此の歸命の一念を發起した事が信心である。我々如來の遣る瀬無き御まことを承つて、あゝ有難いと心中に初めて歸命の一念を發得する、此の如來のまことの初めて徹到して下された一念が信心であります。

二

其處で私はいつも際立てゝお話するのでありますが、此のお慈悲を聞かせて貰ふにも、彌々遣る瀬無き如來のお慈悲の聞こえて下さる處、初めてお慈悲に氣のつく一念の處が肝腎である。人生、生れて佛とも惠みとも知らざりし者が、初めて廣大の悲願を承はり、初めて如來のお慈悲を知らせて貰ひし處が信心の起り故、其處が一番肝腎である。故に今日は茲の味ひをお話致さんと思ひ、此の題を出したのであります。

さて此の歸命の一念が、此方より佛に向ひて、起さんと思ひて起るに非ず、自分の方より有り難くならうと思ひて、自分の方より起す如き一念では無いのであります。今佛の方より私に向ひて、私を哀れみ遣る瀬無く思召し下されてある、其遣る瀬無き如來のお心を聞かせて頂き、其のお心が初めて私の心に屆いて下された處が、歸命の一念である。遣る瀬無き如來のおまことが、初めて私の心に屆いて下された處で、發起するのであります。されば歸命の一念を發起することは、佛の遣る瀬無きお心の程をば、聞かせて貰はぬ事には、能はぬのである。故に之より其の佛のお心の程をば共に喜ばせて貰ひ、此の淺間しき人生の中に、歸命の一念を發起させて頂く有樣を申し述べやうと思ふのであります。

三

先づ第一に氣をつけなくてはならぬ事は、我々の思ひと思ふ思ひには、一つとして眞實と名づく可きものが無い、といふ事である。先日も或る方のお尋ねに、此事を申したのでありますが、人間が此世に日暮しする上に於て、誰しも自分を

惡いとおもてる者は一人も無い、皆な自分は間違ひ無いと思ふて居る。人間は誰でも生れ落ちるより、自然〳〵に我といふものが出來、自分の思ひは間違ひ無いと、きめこんで居るのである。猶ほも一つ申すならば、之れが今生に初まりた事に非ず、無始曠劫以來、我々は此の根性の爲めに、迷ふて居るのである。さて斯く我々は自分は善いといふ考を以て人を眺める故、此の度びは人が惡しく思はれる。自分は間違ひ無いとの思ひを以て人を見るもの故、人がゆがんで見えるやうになるのである。さて一度此の念が起きると、夫れより人を憎み、惡しく思ひ、人に隔てる心を生じ、夫れから夫れと惡念が伴ひて、迷ひの深みに落ち込んでゆくのが、我々日常生活の道行きである。我々が自分は正しい、間違ひが無いと思ふて居るのが、第一の誤りである。自分が既に正しいと思ふてるもの故、人も又自分を正しいと思ひ、かくして皆な五分々々の爭ひをして居るのである。而して此の根本の自分を正しいと思ふ根性がいつ迄も拔けぬもの故、此の世はいつ迄も此の爭ひを續けて行く外、なく無つて居るのであります。

四

猶ほ進んで申しますに、我々斯く人を憎み、隔てる時、其の自分の隔て憎む心が善いかと、も一歩押す時は、假りに自分の考が眞實正しいにせよ、自分の正しきを以て正しからざる者を憎み、隔てるといふ事は實によろしく無いのである。自分が正しければ、正しからざる人を哀れみ、正しきに導く、といふならば善けれども、自分が正しいと考へる爲めに、人を憎み隔てるといふ事は、決して有る可き事では無いのである。茲になると、我々の今日迄の正しい〳〵の考が甚だ怪しくなり、斯る心を持つて居る自分も實に惡いとなる。すると斯く人を疎み、隔てる自分も實に惡いとなり、世の中は誰れも彼れも皆な斯く五分々々で日暮しを仕て居る、事に氣が着くのである。茲になると世の中は何れが正しいやら、正しく無いのやら、分らぬ。聖德太子の十七憲法の中には、

忿を絶ち瞋を棄て、人の違へるを怒らざれ。人皆心有り、心各執るところあり。彼れ是なるときは、我れ非なり。我是なるときは彼れ非なり。我必しも聖に非ず、彼れ必しも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理誰れが能く定む可けんや。相共に賢愚なること環の如くにして端無し。是を以て彼の人は瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖衆に從ふて同く舉へ。

と、斯ういふ御言葉があります。茲になると、今迄自分の正しいのが何より確かな物差しと力んで居たのが、世の中は何が正しいのやら。人が正しいのやら、自分が正しいのやら。丸で世の中は各自に、自分々々の物差を以て計り合ひを仕て居るので、善惡といふ事無くなつて仕舞ふのである。而して此の十七憲法の御文が、不思議にも『歎異鈔』卷末の

聖人のおほせには善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。そのゆゑは、如來の御こゝろに、よしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫火宅無常

の世界はよろづのこと、みなもて、そらごとたはごとまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはします云云。

の御言葉と能く合ふのであります。

五

以上は初めに一應の事を申したのでありますが、近頃は大分新たなる御方が御出て下さる樣子故、先づ第一に我々が、日常、自分は正しいの根性で日暮しを仕て居るのであるが、之が甚だ當てにならぬ事をお話申したのである。さて斯く考へると、我々、人の正しいのは此方が惡いと考へ、自分の正しいのは人が惡いと考へ、互に五分々々で淺間しく日暮し仕て居るので、人間の是非善惡なるものゝ當てにならぬ事は、之で一應は分かると思ひます。

さて一度茲に氣が就くと、人生は唯煩悶あるのみで、今迄自分は正しいと思へばこそ、安んじてやつて來たのであるが、彌々自分が正しく無いとなると、之れからは唯苦しみの來るばかりである。去りながら、之れ丈けでは未だ信仰になつたのでは無い。私自身の經驗を申しますならば、私は此の點に至つて大に苦しんだ。といふものは、今迄自分を正しいと考へればこそ、安んじて自分の主張をも爲し、人を惡しくも見て居たのである。自分は正しい道を歩んで居る、自分の信念は正しいと思へばこそ、今迄人にも先つて、色々やつて來たのである。處が、今迄自分の正しいと思ふて居た事が、彌々正しく無いとなると、今迄自分を正しいとして居たのは、人を欺き僞はつて居たのである。況んや其の考より、人を惡しく不足に思つて居たなど、實に相濟まぬ事である。結局今迄間違ひ無いと思ふて居た自分の信念迄が、人を欺いて居た事になり、爲た事成す事、一として罪惡ならぬは無く、如何にも仕て見やう無き者なる事に氣づいて來たのである。之れが多くの人の苦む狀態である。原因は必ずしも一樣で無い。或は今言ふが如く、自分は正しい事をして居る、間違ひないとの考より、茲に突き當る事もある。或は正しいと仕て居る自分が、思ひ懸け無い間違ひを仕出かして、茲に突き當る事もある。又極端な場合を言ふと、外界に一つも事柄はなけれども、自分の心の思ひなしより、人が惡しく思へ、隔て苦しむ事がある。要するに世間の上の事、事の大小善惡、事實の有る無しに係はらず、何等かの動機により、一度茲に氣がつくと、如何にも人間の價値なき事が分かり來るのである。而して近頃常に言ふ親鸞聖人が『三信釋』のお示しに

然に無始より已來、一切の群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂無く、法爾として眞實の信樂無し。

とあるが之であります。

六

處て人間は妙なもので、斯く迄自分は惡い、當てにならぬと思ひつゝも、眞に心から自分は惡いと思ふて居るかといふに、實は然うは思ふて居ぬのである。我々、自分は惡い困る、と言つて居る言葉の裏には、何うかして此の惡を止め度い、

善くなり度いともがいて居るのである。如何にすれば此の惡が止まるか、止めんとすれども止まず、まことに仕度いと思へども出來ぬと、善くなり度い〳〵の心も起れば、又一方には、惡いは惡いが、惡いは自分ばかりで無い、世間の者も皆な惡いのである。世間の者もする事故、自分も之でも善いのぢやなどゝ、我と我から恕する考を起し、自分で自分を慰めるといふ風である。而して之で安心が出來るかといふに、出來ぬのである。人も惡い事して居るといふ理由が、自分を許す理由にはならぬのである。斯く一方からは「之でも善いのぢや」で安心する事は出來ず、又一方からは「善くせんならぬ〳〵」で善くなる事は出來ず、斯く仕て見よう無き狀態に苦しんで居るのが、我々人間の有樣であります。

七

以上は人生問題の方よりお話したのでありますが、茲が實に肝腎の處で、皆さんの苦まるゝも恐らく茲の處だらうと思ふのであります。すると、我々、惡い心を善くせんならぬと思ふて善くならず、放つて置いても安心がならぬといふ事になる。序に申しますが、今日の世間一般の敎へは、大低此の中のどちらかを敎へて居るのである。今日の時代思想は人間の惡い方面に對して、之は人の皆な爲る事である、人間として避く可らざる、已むを得ぬ處であるとの口實の下に、世の中の凡ての事を許し、之が自然の樣である、人間の自然であると、言つて行かうとして居るのである。又一方嚴格なる倫理道德を主張する側に在りては、人間は惡い心があつてはならぬ、もつと正しく仕なければならぬ、と斯ういふ風に律法的に說くが世間道德の敎へである。我々は此の二者の中に挾まつて居るのである。爲ねばならぬといふ事丈けは、今日の者は皆な知つて居るのである。百も知つて居るけれども、如何せん其の爲ねばならぬ道が實際に行ひ得無いのである。夫れならば、行はいでも善い、人間はそんな事出來るもので無いと、安心して居られるかといふに居られぬのである。故に結局此の世の中の敎へては、我々は安心は得られぬのである。此の世の中の敎へに安心が見出せぬのみならず、動もすれば他力念佛の話でも、此の二者の何れかに傾き易いのである。茲は大に氣を就けなくてはならぬのであります。

八

此の他力の敎を聞く上につき、從來說敎を聞き慣れた人の陷り易き誤りは、如來は惡い者を助ける、淺間しい者を救ふと言つて下さるのである、故に我々は淺間しいけれども、此の淺間しき儘で助かるのである、此の惡い心は人間は到底止むもので無いのである、夫れを今日止めやうとするのが間違ひて、彌々止まぬものと、思ひ分つたのがお慈悲を喜ぶのである、と動ともすれば斯ういふ頂き方になり易いのである。一寸考へると大層安心が出來たやうであるけれども、之では眞の安心は出來て居ぬ。我々は善い心の起らぬもの、惡い思ひの止まぬもの、故にお助け下さるのであると言つて居るものゝ、結局之では淺間しき心は止まぬ、何時迄も此の儘だと言つた丈けにて、眞のお慈悲を頂くといふ所が無いから、之に

ては、何時迄經つても同じ事なのである。何程人間は淺間しき者、惡い心の止まぬものと、心で思ふて居りても、彌々其の惡の止まぬ胸の中を哀はれみ下さる如來のお慈悲を突き止めずして、言つて居るのでは安心は得られぬのである。茲は實に肝腎の處で、非常に間違ひ易いのであります。「私は長い間惡い心を止めよう〳〵と思ふて居ましたが、彌々止まらぬものと知らせて貰ひました」と言ふと、如何にも頂けたやうなれども、斯く言つて居る心持は、今日世間で人間は惡い心の止まぬ者、此の儘でよいのぢやと言つて居るのと、左程違はぬのである。處が又一方には、屹度此の裏が出て來るのである。夫れは、如何にも佛のお慈悲には違はぬも、何うも自分の心は惡い、こんな淺間しき心ではと、自分の惡いことを氣にする心である。從來眞宗では、一念の信を頂いた上からは、せめては〳〵の思ひより、王法仁義の道を固く守るとある御教化を頂いて、何うも自分はせめては〳〵の心より、日常の日暮しを善く爲る事が出來ぬ、何うかして善くならう〳〵と、善くする方に力を入れるやうな事になるのである。動もすれば念佛を稱へるにしても、自分の淺間しき心を取りさり、なだめる氣持で念佛を稱へるやうな事になるのである。斯く此の二者何れかに傾き易くて、眞に安心が得難いのであります。

九

處て今眞實の他力本願の趣きは如何に。私が惡いから佛のお救ひがあるのぢやなどゝ、一口に言ひ得る如き輕き事では無いのである。私の此頃殊に有難く頂いて居るのは、先きにも申した親鸞聖人『三心釋』のお示してあります。

一切の群生海無始より此かた乃至今日今時に至る迄、穢惡汗染にして清淨の心無く、虛假諂僞にして、眞實の心無し。

上來申す如くて、我々は穢れ、虛假、僞りの塊りて、まことなど名く可き心は、更に無いのである。而して其の次ぎに

是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修一念一刹那も淸淨ならざること無く、眞心ならざること無し。

此の「是を以て」が有難いのである。我々は今言ふ如くて、虛假僞りの塊りて、まことなど言ふ可きものは微塵もない。私共の爲る事なす事は、一點の光も無く、皆な闇みである。其の闇みなる處、虛假僞りなる處、隔て心の止まぬ處をば佛御覽下されて、其の闇みなる故に、虛假僞はりなる故に、其の者が可哀相ぢやとあるのである。故に「是を以て」である。佛は我々の其の隔て心の止まぬ處を哀れみて、其の爲めに一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じ、他迄淸淨眞實に爲し下されたのである。我々は五分々々の根性で人が惡い自分が善いと、人を隔て淺間しく思ふて居り、爲る事なす事に一つもまことなど言はる可きものは無い。去りながら、まことが無いと知れたのが、佛のお慈悲では無く、其のまことならざる者を見そなはし、其の者が他迄可哀相であると、遣る瀨無く思召し下さる所が難有いのである。言ひ換へれば私のまことならざる所が、大悲の親の私を捨て切れぬ處で、其のまことで無いのが實に哀れぢやと言つて下さるのである。世間で言ふても、此方より隔て心で

向へば向ふ程、向ふよりは彌々隔てず、汝は自分で隔てゝ居るが、汝の心は能く分りて居る、其の隔てる心が彌々此方は可哀相ぢや、汝は我を不足に思ふも、我は汝の心を能く知り拔き、一念も不足とは思はぬぞと、私の惡い所をば御覽下され、其の惡い處が可哀相ぢやと言つて下さるのである。茲の處を能く知らせて貰はねばならぬのである。

處が茲の所を、汝は我を惡しく思ふも、我は構はぬと言つて下さるのだとなると、はや頂き心が弛んで來る。すると恰も自分が隔て、惡いことするのを許されたる如き心地になつて仕舞ふのである。佛の大悲は、我々を不足に思召し下さらぬ段では無く、我々の爲る事爲す事は實によろしく無いのである。善く無けれども、其の惡いことの止まぬ、隔て心の取れぬ其の心根が實に不愍である、其の不實なる人間が、我は他迄見捨てられぬとある、茲が、如來の御まことなのである。此方は不實向ふはまこと、茲を横着に頂いて、不實とまことの取り替へこの如く頂くと、此方の不實なる胸の中に、向ふの御まことが浸み込んで下さる處が頂けぬのである。此方は何處迄行きても不實だらけの身、其の不實なる者を、他迄見捨てず、他迄善くして下さる向ふ樣の御まことを頂く一念に、あゝ長々申譯が無つた、不實でムりました、此の不實の淺間しき私を、能くも〳〵お見捨て下さらず、今日迄善くして下された親樣の御まことと、初めて遣る瀨無き御心が知らせて貰へるのである。一念歸命といふは茲であります。

一〇

其處て私は常に言ふのてありますが、茲が實に有難いのである。度々申す『涅槃經』の御言葉に

如來は一切の爲に常に慈父母と爲りたまふ。當に知るべし、諸の衆生は皆な是れ如來の子なり。世尊大慈悲衆の爲に苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如し。

我々が色々惡い心の爲めに、惑はされ狂はされて居る有樣を見てゝ下さる親の御心は如何に。我々が間違ひをすればする程、親は彌々其の者を不愍に思召し下さるのである。親が子供の惡い事をするのを、仕てもよいと眺めて居るといふ事は無い。去りながら親の目から御覽下さると、色々の惡魔に狂はされて、子供はあんな事を仕て居るのである。當り前であんな事をする筈は無けれども、惡魔に迷はされてあんな事をして居るのである。夫れが實に哀れて仕樣が無いと、此方が惡しければ惡しき程、大悲の親は遣る瀨無く思召し下さるのである。如來本願の起りは實に茲である。茲を頂くと、此の外に他力眞宗の敎へは無いのである。『和讃』て頂けば

如來の作願をたづぬれば、　苦惱の有情をすてずして、
廻向を首としたまひて、　大悲心をば成就せり。

我々は皆な斯く煩惱の惡魔に狂はされ、狂ひになつて居るのであります。『歎異鈔』の中には茲の處を、

しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、云々。
天におどり地におどるほどによろこぶべきことを……
よろこばれざるは煩惱の所爲なり。云々。

又

また淨土へいそぎまゐりたきこゝろのなくて……死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも煩惱の所爲なり。

皆な之れである。而して聖人の「三心釋」にお示し下されたが即ち茲なのである。初めにも一寸申したのでありますけれども、聖人「信樂釋」の御言葉に、

然に無始よりこのかた一切の群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、淸淨の信樂無く、法爾として眞實の信樂無し。

即ち我々は爲る事なす事煩惱に狂はされ、無始以來淺間しき事ばかり仕て居るのである。夫れを見て、其の淺間しいのが、大悲の眼より見る時は、何より不便なと言つて下さるのである。無始曠劫來我々は、今日今時に至る迄、無明海にほだされて流轉して居る私を、佛は其の闇黑の心を知り拔いて、其の者を他迄隔てゝ下さらぬ御まことである。此方は遁げて廻はるのを他迄追ひ詰めて下さる佛の御まことである。此の如來の、此のまことならざる私を、他迄見捨てゝ下さらぬ御親切の爲めに、今迄人を隔て苦しんで居た私の心の上に、今迄淺間しき事ばかりして居た私の胸の中に、あゝ長々佛は夫程迄に此の私を思召し下されてあつたのか、實に申譯が無つたと分からせて貰へるのである。すると此の一念に、あゝ今迄自分は間違ひ無いと思つて居たが、實に相すまなかつたと、茲が一念歸命の有難い處であります。

一一

其處で我々が、大悲の親心を聞かせて貰ふのは、茲の處を聞かせて貰ふのである。であるから茲にお集り下されてある皆樣は、皆な十人十色の思召を持つてお出になるのでありますが、此の佛の遺る瀨無きお慈悲を頂く時、若し自分の色々の思ひを、佛は之を知つてゝ下さるのだと、自分で然う仕て居るのだと、可かぬのである。「自分の此の苦しい心中を誰か同情して呉れぬか、佛が同情して下さるのかな」と、輕い事になつて仕舞つては駄目なのである。夫れでは佛の大悲を、障子一重隔てゝ眺めて居る氣持になり、私の淺間しき胸の中を直接遣る瀨なく思召し下されてある大悲のお心が頂かれぬ。「其者を遣る瀨無く思ふのぢやぞ」とは、佛よりして言つて下さるのである。佛が然う思ふてゝ下さるのでは、駄目である。

大低の人が言はるゝには、「佛のお慈悲は有難い、私如き者をお助け下さるのである」と、大低の人が多くば斯う言はれる。斯る人に向ひて多くの場合、私の方より其の人の苦しき處を言ひ當てる。「あなたは斯く〳〵の淺間しき心が起りて、人にも言へず心配して居るのだらう、あなた方の苦しんで居る心は、斯うであらう、あゝであらう」と、斯く私の方より先きに其の人の心を言ひ當てる。其の言下に、言ふのは私の口より言ふなるも、大悲の親樣より直き〳〵に、「汝は斯ういふ心があるのであらう、斯ういふ遠慮があるのであらう。其の心のある事を、我は疾くより知つて居る、其の隔て心が取れぬてあらう、淺間しき思ひが止まぬてあらう。其の爲め生きて居られぬ程に苦む汝の胸の中は、我能く知つて居る、知つて居ればこそ其汝を可哀相に思ひ、親は之れ程に呼ぶのては無いか」と、言つて下さる遣る瀨無き親のお心を、斯くいふ私の言下に、直き〳〵に頂いて御安心なされるのである。

先日も石見の或方が木邊の御遠忌に參詣して私に申さるゝには、『夫れては佛は私の心を知つてゝ下さるのでムりますか』と。知つてゝ下さる段では無い。知つてゝ下さればこそ、阿彌陀佛の御本願は現はれたのては無いか。私の善く出來ぬ根性、夫れを知つて下さればこそ、其の善く出來ぬが可哀相ぢやと言つて下さるのである。我々が仕樣なき心の中を、御存知下さればこそ、佛より賜る御慈悲なのである。知るも〳〵一通りの知りやうては無く、我々が氣の付くよりも、ずつと昔に佛兼ねて知し召し下されて、夫れが可哀相て堪えられぬとあるが、佛のお心である。既に十劫の昔に佛は現はれて、其のまことならざる汝の胸の中が、默つて見て居られぬとある遣る瀨無きお心のまゝが、本願招喚の御呼び聲なのである。然るに我々、之を聞かせて貰つて、「夫れでは佛は知つてゝ下さるんだな」と、之れでは佛の仰せを頂いたのてはなく、自分の方より然う思ふたのである。佛の遣る瀨無き思召の程は何處て頂くのかといふに『執持鈔』の中に、

平生のとき善知識のことばのしたに、歸命の一念を發得せば、そのときをもて娑婆のをはり、臨終とおもふべし。

此方より佛が然う言つて下さるんだなと頂くに非ず、其者を遣る瀨無く思ふとある、其の大悲直き〳〵のお言葉の下に頂くのであります。

一二

其處で常に申す話なれど、姨捨山の話の肝腎な處が茲である。子供が親を捨てに行く時に、親を捨てる自分の善く無いといふ事は、知つて居るのである。又破れ籠に乘せられ、默つて子供の言ふまゝに行く親の優しき事も子供はよく知つて居るのである。知りながら、子供は矢張り親を捨てに行くのである。茲であります。我々の日常生活が皆な之れである。我々は爭ひをする事の善く無い事も知つて居る、人を隔てる事の善く無い事も知つて居るのである。「愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑す」我々日常日暮しの善く無い事も、知らぬては無いのである。去りながらひどい話なるも、其の善く無いは知つて居りながら、之れが人間の皆なする事である、人間として避けられぬ處であると、我と我れから皆な許して居るのである。そんな思ひ方ならば、御慈悲でも何んでも無い。斯く淺間しいのが人生の有樣であると、知つた事が、御慈悲では無いのである。自分は狂ひてある、善くならぬ病人てあると、斯く思ふた事が、機の深信が起つたのでも何んでも無い。氣狂ひが、自分は狂ひぢや〳〵と言つて居れば、何時迄經つても氣狂ひてある。人間は斯うぢやあーぢやと言つてる丈けては、何んにもならぬのである。

其處で夫れなら氣狂を止めるか。止めやう、煩惱を離れようとなりて、夫れが止まるかといふに止まらぬ。何程止め度いと力んて見ても、如何にするも止まらぬのである。斯く片

方では、善くせねばならぬと思ふても、善くする事は出來ず、夫れかと言つて、我々は狂ひてもよい、惡い事しても、こは皆んなの爲る事だと、落ち付いて居る事も出來ぬのである。其處で彌々聞かせて貰ふ處は、茲の一所である。何うかといふに、其の何うして見ても惡の止まぬ、其の不まことの心を見て、よくも〳〵呆れも給はず、其まことならざることが可哀相であると、此の親樣の御心である。之れて無くては、人生に光の出て來るためしは無いのである。『和讃』には

無明の大夜をあはれみて、　法身の光輪きはもなく、
無碍光佛としめしてぞ、　安養界に影現する。

此のまことで無い奴が見捨てられぬとの廣大の御まことが、遂に塊り〳〵て本願成就の阿彌陀佛と現はれ下されたのである。善導大師の御言葉では

若し我佛を成らんに、十方の衆生我が名號を稱して、下十聲に至らん。若し生れずば正覺を取らず。彼の佛今現に成佛したまへり。當に知るべし、本誓重願虛しからず、衆生稱念すれば、必ず往生を得。

と。斯る廣大の本願も、其のもとは此のまことならざる私が可哀相と、先きの先き迄私の心を知り拔いて下されたが、もとなのである。茲の處を一人々々に確かり頂かねばならぬのである。佛は貴樣の性質も、貴樣の根性も能く知つて居る、夫れ故其の貴樣が可哀相で堪えられぬのぢやと言つて〻下されるのである。

一三

其處で話が小かくなりますも、『歎異鈔』の十三章が是なのである。十三章に於ては、人間の善惡は、人間の力で止まらぬとて、

故聖人のおほせには、兎の毛羊の毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしと、しるべしと候ひき。

とお示し下され、其の次ぎに、

またあるとき唯圓坊は、わがいふことをば信ずるかと、おほせのさふらひしあひだ、さんさふらふとまうされさふらひしかば、さらばわがいはんこと、たがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領狀まうされてさふらひしかば……

唯圓坊、設ひ生命差し出せと言はれても、御師匠の御言葉なれば、如何なる事でも必ず致しますと、答へると、聖人の仰せには、

たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべし。

それならば人を千人殺して見よ、屹度往生は一定するぞと。唯圓坊、聖人の仰せなれば、確に自分は、如何なる事でも誓つて出來ると、眞地目にお答へした處に、聖人の仰せは斯うである。其處で唯圓坊

おほせにはさうらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしともおぼえずさふらふと、まうされてさふらひしかば、……

私如き者は、千人は措いて、一人も殺す事出來ませぬと申上

げると、聖人、

さてはいかに親鸞がいふことをたがふまじきとはいふぞと。

今迄如何なる事でもきくと言ふたに、何故きかぬか。されば何故親鸞が言ふ事をば、違ふまじとは言つたるぞと。而して此の次きであります。

これにて知るべし、なにごともこころにまかせたることなければ、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業緣なきによりて害せざるなり。わがこころのよくてころさぬにはあらず。其處で聖人端を改めて仰せられたるには、汝之の事を以て考へて見よ、若し心任かせになるものなら、往生のために千人殺せと言ふの故、お前は屹度殺すのであらう。然るにお前が一人も殺す事出來ぬのは、何故であるか。殺す可き業緣が無いからである。汝、殺せぬからとて、自分が善人ぢやなど思ふてはならぬ。汝の心が善いから殺せぬのではなく、殺せぬは殺す可き業緣が無いからなのである。

また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしとおほせのさふらひしは、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことを、しらざることをおほせのさふらひしなり。云云。

其の代はり、又殺さぬ積りて居ても、思ひがけ無く百千人を殺す場合もあるぞ、是れ皆な人間の業なるぞと、茲てあります。

一四

處が若し之を聞きぞこなつて、我々の善い惡いは、皆な業任かせぢやとなるといかぬのである。我々の何事も、止めようたつて止められぬのが業ぢや、業で然うなるのだから仕方が無い、されば業任かせにせよと、なつたら大變である。『歎異鈔』又の御言葉には、

彌陀の五刧思惟の願をよく〳〵案ずるに、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、と。

茲のそくばくの業が、この十三章の業なのである。我々自分が正しい、吾が身は一つ角善く出來てる積りで居るのであるも、我々は凡て皆な此の業を持て居り、此の業が自分の力て一分一厘左右出來ぬのである。我々の爲る事なす事、思ふ事考へる事は、皆な此の業の爲めに、引き廻はされ、迷はされて居るのである。而して佛は我々に其の業のある所を御覽下され、其の業を持つて居るのが不便ぢや、可哀相ぢや、と言つて下さるのである。されば「こそそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ」なのである。我々は惡道に行く可き地獄一定の業の奴なのである。されば、こそ佛は、其の業の奴が可哀相て見て居られぬと、此の度びは佛の大願業力といふ佛の御まことを以て、此の者に向つて下さるのである。だから此の淺間しき我々の業が、大悲本願の大もとなることを頂かねば、本願の有難味は

頂けぬ。佛の廣大なる思召は、私に此の業が無けねば、現はれては下さらぬのである。私が此の業の爲めに日夜苦しんで居る、其の業の深いのが可哀相で見捨てられぬと、廣大のお慈悲が現はれて下されたのであります。

一五

其處で之を姨捨山の話に戻りてお話すると、自分が斯く親を捨てに行くも業のなしわざである、已を得ぬと言つて居るのは、業任かせにして居るのである。其の間は、親を捨つるのは善く無い、止め無ければならぬと言ひつゝ、實際に止めて居ぬのである。

之に就き話が色々になりますも、私は先達て石見で極端なる事を申して來た。何だかせめては〳〵の思ひより御恩報謝をするのであるといふと、始めの助かつた一念に於て大惡を許して貰ひ、夫れが濟んだから之からはせめては〳〵と言つて居るやうで、恰も一遍に百千萬圓を盜んで置きながら、あとから設ひ一圓づゝでも入れて行くのが御恩報謝といふ事が丸で別々になつて仕舞ふて居る。私共は一遍に百千萬圓盜む淺間しき者、其の淺間しき根性を持つ私が、大悲の親樣は哀れ可哀相である、かの、人の物を取るあの性根が哀れ不便ぢやと言つて、下さるのである。即ち姨捨山の說話で申せば、我々は親を捨てる不孝者である。爾るに親ば捨てるのを不足に思はぬ段で無く、捨てられながら其の不孝な子供の爲めに、道々道しるべをして下さるのである。捨てられながら、子供はあとで何うして、歸へる積りかと、大悲の涙を以て眺めてゝ下さるのである。其の間子供は、親は實に優さしき者、子供の爲めに默つて言ふやうに仕て居られる、とは思ふものゝ、親の眞意は更に分からぬ。が彌々峠に達し、親を捨てゝ歸らうとする時親が袖を控えて、「待て。汝が歸りに道に迷はふかと、道々汝の爲めに道しるべをして置いてやつたから、道を迷はずの歸へれ」と、親から一言云はれた時である。親の眞實、親にまことは、子供の爲めに捨てられてゝ下さる位の事に非ず、此方が其のまことならざる心もて向ふをば、親は先きに能く知つて、其のまことならざる思ひが、暫くも可哀相で見て居られぬと言つて下さるのである。此の親捨てる私の心を知り拔いて、其の心根が可哀相と、此の親捨ての私の爲めに、道々道しるべを仕てゝ下されるのである。

一六

今彌陀の五刼思惟の御本願といふが之れであります。若し私の此の業の深い事が無ければ、五刼思惟の御本願は無いのである。若し私共、惡い心が取れ、煩惱が止められるものなら、兆載永刼の御苦勞は無いのである。然るに我々は、此の如何にしても仕て見やう無き處を御覽下されて、夫れが可哀相でならぬと、之より五刼永刼の御苦勞が現はれ、斯くして茲に親が待ち兼ねて居るぞと、之れが本願招換の勅命なのである。て彌々となり、親より私の心を言ひ當てられ、「其の我を捨てる汝の心根が不便な故、親は汝の爲めに道しるべを仕て置いてやつた程に間違ひ無く歸れ」と言はれた時は何うて

あるか。あゝ今迄長々濟まぬ〳〵と思ひながらも、親は道しるべなどして、まだあとから歸へる積りかと、あとから〳〵蹈みにぢつて來たのであるが、あゝ實に間違ひてあつた、あゝ親は斯る私の爲めに、夫れ程に思ふて居て下されたのであつたか、長々御心配かけて、實に濟まなかつた、となるのである。若し私に此の惡い心、淺間しき根性が無かりせば、抑佛が五刼永刼の御苦勞を仕て下される可き譯が無いのである。

全體この信心といふ事が、頂き度い者は頂けよ、頂き度く無い者は、頂か無くてもよい、といふ位の事ならば、佛が其處迄の御苦勞して下さる事は無いのである。佛は我々が今現に生死罪惡の大海に沈沒して居る、其の樣を御覽下さるもの故、其の者を一人も餘さず救はねばならぬ、夫れなればこそ、態々長の御苦勞を下され、遂に正覺成就して、我は其者を救ふ親なるぞと、名のりをお揚げ下さつたのである。爾るに我々此のお慈悲を頂かぬは、長の御苦勞を無にして居る計りて無く、親を蹈みつけて居るのである。爾るに親は蹈みつけられても構はぬが、何うか、此の心丈けは頂き呉れよと、此の親の御親切の爲に、今迄蹈みつけて居た自分が、心底より謝り果てた時が一念歸命である。すると、今迄の如く、私が惡い爲めの御助けぢや、惡い者を見捨てゝ下さらぬのぢや、ては無い。今迄斯く迄の御思召とは思ふて居なかつたが、之れ程廣大の仰せであつたか、之を今迄頂かなかつたは、實に長々申譯が無つたと、自分の惡が一分一厘の未練無く分り、今日今時迄、長々の間違ひでムりましたと、茲に初めて吾が身の惡しさが知らせて貰へるのであります。

其處で、聖人は、之を『信卷』に善導大師の御文をお引用なされて宜はく

深信とは即ち是れ深く信ずるの心なり。亦二種有り。一には決定して、深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠刼より已來常に沒し、常に流轉して、出離の緣有ること無しと信ず。二には決定して深く、彼の阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受して疑ひ無く虛り無く、彼の願力に乘じて定めて往生を得と信ず。

と。私は此頃つく〳〵と茲の味ひを頂かせ貰ひ、深く嘉び居る事であります。(已　上)

告白

懺悔

さかえ

私は誠に誠に、御不思議な、御縁によつて、法界に生れさしていたゞき、今は親様の御ふところの中に限りなき樂しきうれしき日暮をさせていただいて居るものでございます。私はまだ生れたばかりの赤坊で、筆もつことも出來ないのでございますが、先生の仰せ故有難く御受け致して書かせていたゞきます次第でございます。

扨私は性來至つて我慢な負嫌いなたちでございました。それ故兩親にはずいぶん心配をかけたことだらうと存じます。兄も姉も私の身を大さう案じてくれまして、常に筆に、言葉に、私を導きかつ戒めてくれました。それ故私はことに兄と姉とを敎への杖とも、柱とも、思つて居りました。かくて私は兩親兄姉そろつた中に、何の不足なく、此世の無常を知らずして生ひ立ちました。私が十六の春兄はその乘組める艦と共に、悲慘な最後を遂げました。とりのこされし私共姉妹の悲しみは實に實に、たとうるに、ものもございませんでした。あゝいつそかわれるものであつたならとは、其頃の姉と私との間にくりかへされた愚痴でございました。しかし兄の死は私共姉妹にとつて一面に於ては、いかに此世の無常なるかをしらせてもらひ、一面に於ては、精神上に非常な刺戟を與へてくれました。ちやうど此頃からだと存じて居ります私は、あゝ今から考へて見ますとよくもよくも自分のやうな、いつはりだらけの心をあてにして、理想を實現しやうなど云ふ大膽不敵な考を、起したことの、實に實に、淺ましく、おはづかしい次第でございます。自分では、いさゝかなりとも、修養に修養を重ねたなら、つひには立派な人格となれるなど、自分一人きめの考を目的とし、扨之が實行につとめたつもりでございました。兄の最後の手紙には、婦人の美德即ち從順と云ふ德を、みがけと、云はれ、又姉はしきりに、精神修養の大切なることをとき、修養に心掛くる者が、即ち最後の勝利者だと、常に申し、折にふれては、古聖の格言、古歌などを、示してくれました。學校では修身で、理想はどこまでも高くし、之に到達せんと心掛けよと云はれる、あゝ私の修養熱は、いよいよもえ上るばかりでございました。しかし、ひるがへつて我身の實際上について考へて見ますと、實に實に、一つとして、心を滿足させることが出來ませんでした。こゝて、私はまづ、行つまりました。これほど、直面目に、修養を、をこたらぬつもりで、やつてゐるのに、どうして、實行が、出來ないので、あらうと考へ出しましたら、なんとも云ひ知れぬ不安が、わいてまゐりました。たよりにしてゐた自分の心が、ぐらぐら、うごき出しましたので、さあ落ちついてはゐられません。あゝ自分の心は、果してこんなに、たよりないもので、あらうかと、疑ひ初めました。けれど、無理におしつけて、そんな意氣地のないことでどうするかと、一生懸命で、

力んで見ましたが、苦しさは增すばかりで、一向きゝめがございません。心の不安はかくさんとして、かくすことは出來ません。しかし、私は、どうかして、人に、これをさとられまいと、又これで苦しみました。あゝ誰として、自分の今の心を察して同情してくれるものもない、そうかと云つて、思ひきつて、人に打あける勇氣もなく、只苦しい苦しい、どうかして、この煩悶から、のがれたいと、あせつて〳〵て、終夜一睡もしないて、泣き明かしたことは、しばしばでございました。こうなると、人のすること、なすことが、皆惡く見えてなりませんでした。當時の日誌を見ても、自分は人が善意でなすことも、惡意に、解釋してこまるなどと、してございます。これをもつても如何に自分の、うたがひ心の、强かつたかと云ふことが、わかります。當時學校からは、どうも、自分の此頃の樣子が落つかず、注意力が、にぶつたやうだと、御注意を受ける、從つて、成績は前とくらべて下ると云ふやうなわけて、いよ〳〵、煩悶は極に達しました。當時兩親は遠方に、居りましたので、私は叔母の家に、厄介になつて居りました。叔母は、自分の事に付いて、非常に、心配してくれて、あらゆる名醫の許に、つれて行つてくれました。しかしこれと云ふ名のつく病氣のあらう筈もなく、醫者は、どうも神經が衰弱してゐるやうだと、一樣に申しました。私は不安と同時に一種云ふに云はれぬ淋しさを感じました。姉は其頃から或善智識樣の御手引によつて、非常に法を善ばして頂いて居りました。私は御佛緣遠くいまだ、御說敎承はつた事もなく、御寺參りをしたこともございませんでした。それで、宗敎と云ふことについては、何も存じませんでしたので、至つて冷なか、考をもつて居りました。しかるに、其頃姉からくる手紙を見ますと如何にも、喜びに滿々てゐる樣子が紙面に、あふれて居ります。自分は、之を見て何が、こんなに嬉しいのかと、初めは、不思議な位てございました。一夜、とても內心の苦に、たへられないで、つひに、姉の許に、一切を打あけました。姉は自分の身を、非常にきづかつてくれ、如來樣のやるせない、お慈悲を、私に、わかるやうに、きかせてくれました。しかし剛情な私には、一向わかりませんでした。けれども一度ききだしましたら、又このことが氣になりまして、とてもだまつてはゐられません。勝手な理窟をつけて私は姉にはむきました。いな、如來樣に御そむき致しました。姉は之に對し、すぐに答へ、かつ必死になつてまよへる私をといてくれました。如來樣の絕對の御慈悲、我々罪惡深重の衆生、この罪業の衆生あるが爲に、永々の間如來樣も御苦勞下された、我々はこの絕對の御他力によつて御救ひに與かれるのだと云はれました。あゝ私はこの點て、非常にこまりました。有體に申せば自分の現在の方針と衝突したと、思ひました。自分はせつかく修養して向上進步したいと願つてゐるのに、絕對の御他力ああ自力で行かれない、それては、今迄の自分の苦心も、水の泡となつてしまふ、なぜ姉はこんなことを云ふてくれたらう、いな如來樣もなぜかやうなことを、仰せられたらう、もつたいなくも、如來樣を御うらみ申し、實に實に、姉は自分の向上の第一步を蹂躙したかのやうに思ひ、非常に失望落膽致しました。あゝこのあれにあれくるうて居

りまして、如來樣に御そむき致しました何ともしてみやうのない、惡い奴がとうどう如來樣の御前に頭を下げ、もうもう、あげる事の出來ないやうな、仕合せな身にさしていたゞきました。

姉は私の狂氣じみた手紙を見て、いよいよ、不憫に思ひ、やるせなき、如來樣の御慈悲をまちがへてとられては、大變と殆ど、我を忘れて、夢中で、話してくれました。如來樣はこの私と云ふ惡い奴一人あるが爲めに、五劫十劫が間御苦勞下されたのかと思ふと、實にもつたいなくて、身のおきどころもないと申しました。あゝ私一人が爲に、御苦勞御かけ申したのであつたか、はつと氣づかしていたゞいた一念に、もうもう、とても立つてもゐてもたまりません。うれしさと我身の淺ましさに、全身の血は煮えかへり、只々身のおきどころもなくて、泣きくづれました。この瞬間の形容はとても筆にも言葉にも、つくされません。

あゝよくもよくも、如來樣は、このしてみやうなき、私をあきれ給はず、手をかへ、品をかへて、御手引下されついに御親心を知らせ下されたとはあゝ、なんとしたありがたいことやら、只々南無阿彌陀佛と頂くばかりてございます。其後私は御緣あつて、求道學舍に先生の御講話をうかゞはせていたゞいて居ります。先生の御話はどうしても、如來樣御直々の御言葉とより、思はれません。あゝ私は御佛緣遠い家に生れながら、今は姉妹二人ながら如來樣の御慈光の下に、樂しい日暮をさせて頂く幸福な身にしていたゞきましたとは、よく〳〵御緣の深かつたことと、唯々宏大無邊な、盡十方無碍光如來樣の御慈悲を喜ばしていたゞいて居る次第でございます。南無阿彌陀佛々々々々々。

一、和上曰く。彌陀の十劫正覺とは、父子の身代を合併成就し給ふたことである。彌陀の功德は衆生のもの、衆生の罪咎は彌陀のもの、それを別々にするからいけぬ。別々にするとは、お慈悲は疑はれど、罪が多いからなど云ふて居ることぢや。元々衆生の身代は罪より外はない。それで高僧聖人は「無始より以來、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして淸淨の心なく、虛假諂僞にして眞實の心なし」と宣ひ、又阿彌陀如來の身代は、「不可思議兆載永劫に於て、苦難の行を行ぜし時、三業の所修一念一那刹も淸淨ならざるなく、眞心ならざること無し」と宣ふて、元は雲泥と云ふも啻ならぬ違ひである。が其次に「加來淸淨の眞心を以て、圓融無碍不可思議不可稱不可說の至德を成就し玉へり」とあつて、一つものにして下された。

（七里和上言行錄）

感謝之紀念

原　基

私は昨晩盛田さんと共に、本郷森川町の求道會の信仰談話會に參りました。時刻は七時頃でしたが、近角先生を始め二三十の人が、座敷に輪に成つて居りました。何となく賑々しい會合の樣に思はれました。私が此求道會へ參りましたのは、今晩が初めてゞ有りまして、辻々に張り出して有る求道學舍の道しるべ迄が何となく愉快な感じを與へました。

やがて追々と參詣の人が、集まつて參りました。葦原先生もお出てに成られました。近角先生が、今晩は信仰におは入に成りました方々に告白を願ひましやう、求道の方にも力に成りますと仰せられました。其の時私ははて困たものだと思ひましたと申すのは、私は元來人の前て辯舌のが不得手て、之までも葦原先生から、本郷へ行て告白をし給へ、しなければいかんと、度々申されましたので、甚迷惑に思つて居りました。若しや、今晩もヒョット告白とても云はれたらとビク々々して居る矢先きでしたから、胸がドキ〳〵致しました。

始めお婦人の方が、告白されて、七年前に死んだ母に會はして戴く事が出來たと喜んで泣いて居られました。近角先生も、種々御說明が有りました。其の內に、東洋大學の某氏が非常に苦しんで居られる樣子でした。近角先生は、之に熱心に御講話をされて居られましたが、其の御講話の內に屢々佛樣のお慈悲の廣大なる事を御說き下されました。其が、一々私の胸中に犇々と刺される樣に思はれました。御同感の人も澤山有ると見えて、念佛の聲が頻りに聞えました。婦人方ては、ヒイ〳〵と喜び泣きに泣いて居られました。實に私も先き程から泣きたかつたのですが、男では有るし、會集の手前不體裁でしたから、ヂッと耐へて居りましたが、曾て私の苦しんで居りました時と、今お慈悲を頂いて喜んで居る時を、思ひ合せては、唯有難さに南無阿彌陀佛〳〵と念佛申して居りましたが、とても耐へ切れませんでしたから、泣いてしまひました。誠にお耻しい次第です。近角先生が、私に向はれまして、只今非常に御感じなされた御樣子ですが、何にか、お感じに成りましたか、一つ皆さんの前で、あなたの告白を伺ひましョーと仰せられました。今は什麼して無言で居られましョー。私から進んで告白をしたいと思て居りました時ですから。

ハイ只今先生の御話を伺つて居りまして、自分が苦しんで居りました淺ましい心が、斯くまでに喜ばして戴かれるかと思て遂泣かされました。私の煩悶の動機は、曾て友人の一人から、一寸した事から疎遠にされた事が有ります。是が抑も破綻の元て有りました。其からは、堪えず人を疑る樣になりました。自分は、他の人に對しては、心を盡して親切にして居るのに、先方では、其れ程に喜んでくれないとか、其のみならず無情て有るとか、之程までに思てやるのに、そーでないとか、時には如何にも胸襟を開いて腹藏なくするので、愉快に思ふ、併かし直ぐに、手の裏を返す樣に變つてしまうとか、只先方が惡い、相手が惡いと、人の無情ばかり、憤つて居りました。此の嫌やな心持が、始終頭の中に、蟠まつて居りましたので、何となく世中が、つまらん樣に思て居りました。

之てはいかん、什麽かして、此の嫌やな根性を取りたい、此の苦痛を除きたいと、自分て自分の心を叱かつて見たり、勵まして見たり、或は自分で道德的の物を作つて見たり、修養して見たり、色々の本を亂讀したり、無論修養的の本も讀みましたが、何にも成りません。煩悶は依然として變りません。私は元來小さい内から、基督敎の日曜學校へ參りまして、說敎も度々聞きました。讃美歌も得意でした。聖書の講義を聞いて喜びました。熱心に祈禱をした事も少くはありませんでしたが、偖て之が、今此苦しんで居る私に對してどれだけの、慰籍になるかと思へば、一寸もなりません。基督の十字架上の苦痛は、自分の苦痛と幾何の差が有るだろーか、悶々の心は、遂に自分から身を狹まくして、曾てれ澤山有りました友人も、追々遠ざける樣になりました。顧れば自分はこんな性質ではなかつた、隨分人からも可愛がられたし、踊たり、跳ねたりして、無邪氣に騷いだ時代も有つた。アー其の時代が戀しい、思へば此の苦痛も友人の成せし業と、人計り恨んだ事も有ります。曾て私の友人が戯かひ半分に、君は熱し易く、冷め易すしと、冷笑的にいつた事が有りました。此の時などは實に癪に障りました。今斯くして苦しんで居るのは、皆君等の爲だ、親友として賴みにして居ても一寸も信を置く事が出來ぬ。斯くまでに、君等の爲めに心を盡してして居るのに、其の苦しい心も察せず、よくそんな事がいへると、さすがに、口へ出しては申しませんが、隨分腹の中ては恨みました。悲しい哉自分で造りました修養も、道德も、砂で作りましたお山の樣に、直ぐに壞れてしまひました。作つて壞れ、壞れては作り、誠に兒戯にも等しい有樣でした。よし理想に畫いた事を實行して見樣と決心して、辛ふじて實行し得た其時は、非常に痛快に感じますが、偖て之を完成するまでには、非常の努力と奮鬪を要したのです。却つて此の奮鬪に苦しんだ位ひでした。折角苦しんで出來上た道德も、修養も、いつしか水の泡と消えてしまひました。無情なる世を呪ひ、冷やかなる人の心を恨む、煩悶は少しも變りません。現に去年の暑中休暇八月上旬の事でした。月の美しい夜大磯の海岸を、包み切れぬ苦痛を抱いて、ひた走りに走りました。非常に勞れたので岩の上に腰かけて、打寄する汀さに足を洗はれ涼しい風に吹かれつゝ、月を仰ぎ見ました時、自分は此の美しい月の光に全身から浴びせかけられて居るのに、氣がつきました時アー馬鹿々々しいと云ふ感じがして、月に對して氣まりが惡るく成りました。其の夜は眠むられぬながら、床につきとつおひつ冥想に耽けりました。癪に障つた心はなか〳〵止みません。遂に其の翌日富士の頂まで、飛び上りました。流石に、頂上に達した時は、總べてを眼下に見下して、よい氣持でした。凡そ富士開闢以來私の樣な不平滿々て、頂上まで飛び上がつた者は恐らく有るまいと笑可しく成りました。思へばよく此靈山が、鳴動もせずに無事に下山する事が出來ました。

自分以外誰にも告げられぬ此のやる瀨ない苦痛は、いつの世になつたらば消えるであろーか、生涯此の苦痛の内に悶死するかと思えば、人生は實に苦痛なるものであると、熟々感じました。誰か此の苦しい心を、察して同情して呉れるものはないだろーか、もしも同情して呉れる者が有つたらば、什

麽なに愉快だろーか、如何に心が晴れ〳〵するだろーと、愚にもつかん事を考へて居りました。時には友人から親切に云て呉れる事も有つた、隔てなくして呉まれしたが、什麽も其が不足で不足で折角友人の親切を無にしました事も度々でしたが、備後の太田と云ふ人てすが、此の人の氣質が一寸私に似通ふて居るので、時々同情して親切に云つて呉れるので、非常に力に思ふて居りましたが、昨年の夏歸國してしまひまして其以來上京しません。時々手紙の往復をしては自分の心を慰めて居りましたが、到底其の位ひでは助かろーなどが有りませんですが、せめてもの心やりてした。所が、私の友人加藤なる人が、君は樗牛全集を讀んだ事が有るか、若し讀まなければ讀んて見玉へと云はれましたので、早速借用して讀みました處が、計らざりき、是が私の煩悶を慰籍して呉れる唯一物で有りました。中にも全集の第五の中の平家の悲壯の未路、菅公の悲哀なる詩的の生涯、瀧口の厭世的生活、吾が妹の墓、殊に氏が友人に送りし手紙は、喜んて誦續しました。溫かい友情に尊敬しました。故高山先生は私にとりて此の上もない同情者て有ると喝仰して止まなかつたのです。併かし唯慰籍されただけで、やはり人の無情を恨み、輕薄なる世を憤る心は腰をすへて動きません。其の上に鄕里の家庭に、色々込み入つた事情が、起つたので、私の煩悶は益々度を加へました。

此の樣に成りますと、誠に親不孝の次第ですが、親兄弟を思ふの念が薄く成りました。休暇々々に他の人が喜んで、歸國するのに自分は少しも歸りたくないのみならず、反つて嫌な位ひでした。併かしたまに歸國しますと母などが、停車場に迎ひに來て居ります。流石に久々の事ですから、懷かしく思ひますが、夫れも束の間て直ぐに母に劒突くなどしましたが、母は反つて嫌な氣もせずに優待して呉れました。アー誠に濟まん歸り匆々實に惡るかつた、是も病氣の爲めと親にも告げられず、心に苦しんて居りました。其ても家へ歸りますと親の慈愛に苦痛の幾らかを持つていかれて氣が輕く成つた樣に覺えました。

併かし此の樣にも思たのてす。こんなに人を不足に思て恨んだりしても、どうせ他人ではないか、其をいくら燒きもき思ふたからとて什麽する事が出來るものか、賴みにならん者を賴みにして居るのは自分が惡いのてはないかと、朧ろげながら悟る事が出來ました。今から思ふと是が大慈大悲の御招喚に會して戴く一歩てした。誠に有難い次第てすが、此の時是てもまだ自分も幾らか惡いが、先方は猶惡いからと思て居りました。實に淺ましい次第です。

南無阿彌陀佛〳〵、偖時は明治四十五年六月六日夜の出來事てありました。私はいつもの通り寄宿舍々監室に葦原先生と一ッ机の上て、例の通り樗牛全集の第五を讀んて居りました。此時私は突然葦原先生、瀧口入道なるものは安心立命の上に往生したのてショーかと聞きますと、否決して瀧口は安心して居らん、却つて煩悶の生涯を送つたものて有ると申されました。私は少し的が違ひましたから、然らば嵯峨野の奥に遁れて身に黑染の法衣を着て口に鈴を咬へて日夜の勤行をして疇昔自分の意中の人なる横笛が逢る〳〵訪ねて來たにも關ら

ず、其にも會ひもせず、鈴の音も亂れず、續經の聲も亂れず、行ひすまして居られましたが、あれでも安心ではないのですか。其れがいかん、何も自分の思つてた人が來らば會つてやつたらよいではないか、抑も〳〵瀧口入道なるものは著者高山林次郎氏の煩悶の狀態を寫したもので、所謂氏の理想を著したのです。折角會ひに來た横笛に會ひもせず、益々行ひすまして居たのは、其の彼の努力奮闘は並一通りでない胸中の苦痛は實に甚しかつた次第であると申されました。私は今が今迄でも愛讀して居りました、耨牛を散散に云はれたのですから、非常に不愉快に感じたのみならず、今までの同情者を取られた樣な氣がしましたので、色々質問致しました。先生も色々と、佛敎の話をして下さいましたが、只今委しい事は少しも思ひ出せないで、甚だ殘念です。私はだん〳〵苦しく成つて參りましたので、實は私はこまて自分で道德的のものや修養的のものを作りました。兎に角心の苦悶を除きたい爲めに種々なる方法を取りましたが、何の效力もありません、眞實の安心を得る事が、出來ません。いつ迄私は此のまゝ苦しむのでショーカ、成る程先生の仰せらるゝ通り前へも進めず後へも退けず、つき當つた切りでどうにも成りません と申しました。君が今自力で安心を得たいの、苦痛を去りたいと云ふのは、疑城胎宮邊地懈慢と申して、又自力で什麼にかしようと思ふだけ、其だけ、心に猶豫の有る不遜な甚だ贅澤な次第である、其ではとても眞實の安心を得る事は出來ん、眞實の安心とは廣大勝解者と申してどつちへも動く事なく、確かなものです。私は甚羨しく成りましたから、其では什麼したらば其の廣大勝解者とか云ふ安心を得られますか、と伺ひました。君の樣な人はお氣の毒ながら一生苦んで終るのです。自力でやつて居る間はいくら焦心(あせ)つても到底無駄です、基督敎の某氏の如きは克己とか申してやつて居るが、さて自分の心の中には少しの安心もなく、克己の爲に努力云々と申されました。私は此の時少し癪に障りましたから、他の人の事などは什麼でも其んな事は聞きたくは有りません、私は什麼なるのですか。君は調度今は高ひ崖から松の木が出て其の枝に蔦葛が下がつて居る、其れにぶら下がつて居るので、其の崖の下には大波が打寄せて居る、其の中に毒蛇が口を開ひて待つて居る、而かも君のつかまつて居る蔦葛は鼠が刻一刻と喰ひ切て居ると言はれましたので、私は其の苦しみと恐ろしさに堪え兼ねて、其では私は此儘一生苦しむのですかと云ひ畢らずして泣いてしまひました。菫原先生も頗る面喰らつた樣子でした。此處はいかんから伊澤先生の室へ行ふと申され、先きへ立つて行かれました。私は後から涙をふきながら長い廊下を苦しい思て參りました。此の時伊澤先生は、歸省中で、室には誰も居りません。私は此の室へは入るなりに苦しくて〳〵座敷中を泣いて回た事は覺えて居ります。此の時の苦しみと申たら何と申てよいやら何ともお話の申樣が御座いません。日頃の煩悶苦腦が一時に押し寄せて來たのです。唯々苦しい〳〵と轉げ回るのでした。先生は私の苦しんで居る前にお座りに成つて、種々佛樣のお慈悲の廣大なる事を話されましたが、少しも解りません。唯解りません〳〵。其んな事をお仰ると猶苦しいと、今から思ふと實に勝手な事を申しましたと思ひま

す。先生は成る程いかにもそうだ、今迄てお慈悲の事を聞いた事がないのだからと申されました。私には此の言葉が、此の場合非常に嬉しく感じました。併かし少し其の狂ふ心をお打付けて聞き給へ、今君が、自分から求めて其の樣に苦しんで居ても、君の慈愛ふかき兩親も、兄弟も、朋友も、乃至君の前に座つて居る私でさへ、此の場合どうする事も出來ん。唯々此處に他力本願のお救ひが有るばかりでは有りませんか、其の樣に苦しむ有樣を佛樣が久遠劫の昔よりお見透し遊されて、如何にも其の心が可愛想だ、其の苦しむ有り樣をやる瀨なく思召しなされての豫ての御本願です。大慈大悲の御招喚の聲が、聞えませんか〳〵。之れまでに、お仰しやつて下さいましても、如何したらば救はれるものか、どうしたら好いのか、其の方法が少しも解りません〳〵苦しい〳〵と胸を押へて狂るつて居りました。とても私には解からんから窓から飛び出そうと思ひまして、今まで伏して居た頭を上げました、誠に地獄の樣が此の時の私でしたらう、よく〳〵罪業の深い私でした。其の時先生が、君は今佛樣が、一生懸命に救てやらうと思召して引き留めて居られるのを、其を逃れ樣逃れ樣として居るのだ、私の云ふのは私の聲では有りません。佛樣のお聲です。君を招喚して居るお聲ですと、兩手をこうして何か物をすくひ上る樣な手つきをして居られました。が、甚だ幼稚な考へですが此の場合其の手の上に上ればよいかとまで思ひましたが、私の聲ではない佛樣のお聲だとお仰せられた時に、只おすがり申せばよいのですかと、苦しい息の下から伺ひました。此の時は最早地獄の火に燒き盡される最後の一瞬間でした。

菫原先生は「其處だと」力のあるお聲で叫ばれました。其お聲こそは實に私が永遠無窮の未來まで徹底したる大信仰に入るべき佛陀の光明の閃らめきでした。私は先生のお聲と共に何がなしに轉げ込んでしまつたのです。そうなると急に嬉しい樣な、悲しい樣な、唯わつ〳〵と泣いて笑て笑て泣いて之が泣き笑ひと申すのでしょう。急に身體が輕く成つて少し氣が落ちつきますと、嬉しくて〳〵笑へて〳〵少し氣が狂たのではないかと思ひました。私の前には菫原先生がニコ〳〵して什麼だ、モウ一遍迷つて見ないかネ、拜見し樣と云て居られました。今が今まで、此處で悶え苦しんだ、自分が一轉して此の喜びに會ふとは、佛樣のお慈悲の有難いと申すよりは實に不思議でした。唯今までの苦悶が拭ふ樣に消えてしまつて清々致しました。此の時の喜びの形容を充分書きたいのですが、とても〳〵筆や紙の及ぶ處ではありませんから、之だけにして置きます。

其の晩先生に能發一念喜愛心、不斷煩腦得涅槃、凡聖逆謗齊廻入、如衆水入海一味と書き、其の下に明治四十五年六月六日夜十時原基轉入本願大智海として下されました。其夜は先生と共に、南無阿彌陀佛と念佛申してお別れしまして笑ひながら寢てしまひました。其翌日先生から本を拜借したり、色々お話を伺ひましたが、少しも有がたいとの念が有りません。はて是では未だ眞實に佛陀の救ひの中に抱かれて居らないのかしらん、其にしては頭の中に何もなし、昨日まで頭に有つた事は總べて消えてしまつたし、今までは窓から外を見ても一

つ〳〵眼に觸るゝものが、意味有り氣に見えたのが、今日は總べてが、一樣に成つてしまつた。是てはやはり大慈大悲とやらの中に有るのだと思ひまして、南無阿彌陀佛と云て見ても少しも有難くなかつた、誠に勿体ない話です。葦原先生が明日九段の求道講話會へ御禮に參らうと申されました。はいとは申しましたが、實は迷惑千萬でしたと云ふのは、是から時々いかんと信仰がうすく成つたかの樣に葦原先生に思はれては困るし、とふつて聞くのは面白くもなしと、甚困て居りました。是の考への出たのは基督敎で信者が敎會へ出ないと直ぐ信仰が、冷へたとか薄く成つたとか申す言葉が、耳の底に有つたものですから遂其を思ひ出したのです。

さて土曜日午後からいや〳〵ながら、強いて先生と參りました。講話の題が神智洞達とかして有りまして、非常にむつかしい、之が解かるかしらと思ひまして暫くして居りますと、お講話が始まりました。近角先生に御目にかゝるのは此の時が始めてゞした。お話を伺ひますとサアー什麼でショーよくも〳〵私の心を知りぬいて棚下しをしたものだ、お話をなさればなさる程、私の思てた事考へた事を一つ〳〵お仰せらるゝので、實は氣まりが惡るく成りました。側に居られました葦原先生を見ればニコ〳〵して居られるので、益々小氣味が惡るく成つて來ました。之は必らず私が氣づかん間に電話にて、私の身上をお話して置かれた事と思ひました。後て伺へば之が近角先生の始終御話になる心絃の共鳴と云ふ事だそうですが、其の時は誠に氣まりの惡い樣に思ひましたが、今迄私が思つたり考へたりした事は悉くつき當つた切りで、前へも後へも行かずして居たのが、一つ〳〵氣持よく解決がついて針の先き程の蟠りがないのです。嗚呼有難い實に有難いと云ふ事が、犇々と胸に覺えました。幾度か念佛を申さうとは思ひましたが、始めてゞ氣まりが惡いものですから、だまつてお話がすむなりに皆さんと共に大きな聲で、南無阿彌陀佛〳〵と心から喜んで念佛を申さして戴きました。誠に有がたい仕合せです。

嗚呼實に惡るかつた、今までは頼みない世に頼みない人を相手として只人を不足とのみ思つて恨んだり、怒つたり、疑つたり、人に人にとのみ、求めて居りました。後から友人が實際つき合ひ憎くかつたと申しましたが、成る程そうて有つたらう、思へばよくも愛想盡かしもせず、附き合て呉れたと誠に親友の心が嬉しく感じました。廣大なるお慈悲に氣づかして戴くと總べてのものが感謝の源に成つて居ります。今に成つて見ますと自分の心に雲の樣になりました苦腦が、西の空に消えて行く樣になく成つてしまひました。南無阿彌陀佛〳〵。

今はたゞ彌陀の月のみさへ渡る
消えゆく雲の跡ぞ戀しき

談話會にては充分に申し切れませぬでしたから、此處に附言致しまして感謝の記念と致します。

明治四十五年七月五日

親ごゝろ

堀　勇吉

一

今回の夏期求道會に揃らずも御緣を得させていたゞきましたのは私の深く感謝する所であります。就ては此の際先生に對して一言御禮を申上げると共に、信仰に關する私の實感を有體に告白して、これて宜しいものか、否な宜しいものかではない、必ず方角が間違つて居るに相違ないから、先生の御叱りを頂きまして、是非とも此の機を逸せず、正しき信仰に入りたいものと存じ茲にこの書を認むるに至つたやうな次第であります。

二

私は鹿兒島の者で、一昨年の夏、鹿兒島の大谷派別院に於て先生の御法話を拜聽致しましてから、不思議にも先生を忘れることが出來なくなりました。と申しますのは、私は久しき間佛敎の御話を聽聞して居りましたけれども、先生の御法話を拜聽しましてから、全く私の從來の考は間違つて居たことを發見したのであります。これは私にとりましては實に容易ならぬ大事件でありました。私は先づ此の事から申上げなければなりません。

三

先生、私は明治三十九年に早稻田大學を出まして、先生が鹿兒島に御出向になりましたときは、新聞社に奉職して居たのであります。私は法律を修めたもので、今も尙ほ此方面の研究をやつて居るのでありますが、佛敎は祖父や父が深く喜んで居りましたので、私もいつとはなしに口に稱名を唱へるやうになりました。無論、深き意味は解らずに、唯だ因襲的にやつて居たのであります。然し是の如き事由により、佛敎に關する諸名師の著書は常に多大の興味を以て讀み、又佛敎に關する講話等は出來るだけ繰り合せて聽聞に出掛けたもので、あります。

四

先生の御法話を拜聽する前、即ち明治四十二年夏、鹿兒島大谷派別院の講習會に於て、佛敎倫理と歎異鈔講話を拜聽するに至りしとき、私の佛敎に對する考は俄然動搖を始めるやうになりました。殊に歎異鈔講義によりて、私の佛敎に對する從來の考は、全く根底より變更せねばならぬことになりました。私は此の時までは、佛敎と倫理とを同列に於て觀察して居たのであります。吾々は多少高等敎育を受けたもの（御笑ひ下さいますな、全く然か自惚れて居ましたよ）であるから、理由を付することなくして信ずることは到底出來ないことである、少くとも愚夫愚婦に對するが如き說敎では滿足することは出來ないと始めより左樣決めてしまつた、これが當然であるかの如くに考へて居たのであります。何たる誤解でありませう。今より思へば洵に赤面の外はありません。

五

歎異鈔講義によりて動搖を始めたる私の思想は、先生の唯心鈔講話によりて、始めて安定の位置を見出したのであります

す。殊に從來の法話とは異つて、先生の法話は一々金言の如く私の胸の中に響き渡つて、私の胸の中は先生の法話を拜聽して居る間、絶えず波動して居り、法話終るや波動も亦靜まり來りて、何とも彼とも申し難き有難さを感ずるのでありました。從來有難や〳〵一點張りの信心は程度の低い淺薄なる信心とやうに考へて居た私が、先生の法話に接してからといふものは、有難いといふ事をはなれては信心はないといふ事に氣付いて參つたのであります。斯くて先生の法話によりて、私は阿彌陀如來の遣るせなき御慈悲といふ事に氣付かして貰ひ、全く從來とは正反對の方に思想の方向轉換を行ふて、其處に安定の位置を見出したのであります。私はこれより私の實驗を申上げなければなりません。

六

私は十年以前に高等學校に在學中、父を失ひました。私は其時二十三歳で、私の下には五人の男子の兄弟がありますので、父の死は私共にとりては非常の打擊でありました。然し其當時は私は血氣盛んで、所謂、青春の血が燃え立て居ましたので、父に分れたる悲哀の情は忽ち姿をかくして仕舞ひました。而して私は酒も飲み、煙草も吹いて元氣よく學窓の下に日を送つて居たのであります。父の死後私共は千圓近くの負債あることを知りました。多少の動産不動産は遺しましたけれども、此の千圓近くの負債償却といふことは、私共にとりては甚だ困難なる問題でありました。而して兄弟協議の上、私は上京して早稻田大學を卒業するまで書生生活を續くること、其の學資金は、第三の弟(當時十七歳)母と共に家を守りて之を都合つけること。第二の弟(當時二十二歳)は十九歳の時より既に米國に渡り居りしを以て、此第二の弟も私の學資金を補助すること。私卒業の上は第四第五兩人の弟の學資金は私一人にて之を引受くること。千圓の負債は私の卒業後、第三の弟渡米して勞働により之を償却することに決定したのでした。此の間の事を詳述することは茲には止めまして、唯だ結果だけを申上げますと、父の死後四年にして私は約束通り早稻田大學を出て、直ちに鹿兒島新聞社に入りまして、第四の弟(當時中學の第三年生)の學資金を引受くることになりました。此の弟は現に海軍兵學校に在學して居ります。來年卒業の筈です。又昨年より第五の弟中學に入りしを以て、之の學資金も亦私が引受けて居ります。而して第三の弟は私の卒業後直ちに渡米して、先きに渡米したる第二の弟と協力して勞働をなし、毎年少しづゝ本國に送金して、遂に昨年の夏までに、此の千圓の負債を見事に償却することが出來ましたやうな次第であります。私は第四の弟が海軍兵學校に入學しまして、第五の弟が中學に入るには一年間間がありますので、母の同意を得て再び昨年の冬上京することになりました。母を一人故郷に殘し置くこと、誠に不幸の極でありますが、生活上餘義なき次第故、母も私共の心中を察し不平一つ申しません、誠に有難いことであります。扨て長々と身の上話を致しましたが、之れだけ申上げねば私の懺悔談を述べることが出來ないからであります。

七

昨年の夏東京に於て、私は米國の弟より一通の手紙を受取

りました。其手紙こそ即ち私の目をポカリと明けてくれた有難いとも何とも申し樣なき貴きものであります。其手紙の意味は、とう〳〵負債を償却することが出來ました、母上もうれしかろ、兄上もうれしかろ、私も實にうれしいです。祝杯を擧げたいが、それは兄上の目的を達せられたるとき一緒にやりませう、どうか早く目的を達して下さい。とこういふのです。此の時不思議にも私は此の手紙によりて、死せし父に對して濟まなかつたといふことを氣付かして頂いたのであります。と申しますのは、私は書生生活中も、亦新聞記者時代にも、實に相濟まない次第ながら、もつとよい父を持ちたかつた、換言すれば負債などを遺さないで、財産をうんと遺してくれるやうな父が欲しかつたのです。然るに其の負債は元來私の學資金の爲めに生じたものであることを知り、又兄弟協力して五六年間働けば立派に償却出來る位の負債であつたことを知り、又五人の兄弟が揃つて世間並の頭腦と身體とを具へて居て、一人の不具者なきことを思ひ、此の負債の爲めに兄弟の間互に爭ふことの代りに、相助け合ふの心を強くして、近隣の人より珍らしき仲善き兄弟といはれ居ることの幸福なることを思へば、もつとよい父が持ちたいとは何事ぞ、此以上の父が何處にあるか。財産何物ぞ、父子兄弟の和合を外にして何の幸福かある、斯程大恩ある父の恩を知らずして他人の身の上を羨しく思ひ居たりしことの淺ましさよと、此の手紙を讀むなり、既往の不心得が突差の間に思ひ出されて、懺悔の涙とどめ難く、これによりて又先生の法話の事を思ひ出し、我身の罪惡深重なることの意味を切實に感じさせて貰ひました。又同時に如來の親心なるものを全く知らでありしことを、此手紙によりて氣付かして頂いたやうな心持がしました。而して私は茲に始めて、

彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。云々。

の意味を體得したやうな心持が致しました。衞來今日迄歎異鈔を拜讀して居る間に、時々新らしい意味を見出して、それが又何ともたとへがたき有難さの感となるのであります。近頃最も著しく感じさせて頂いて居りますのは、

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて云々。

のあの不思議といふ意味であります。

以上要するに私は先生の御法話を拜聽しましてから、全く思想一變して、有難い〳〵で日送りをさせて頂き、又元氣よく自己の目的に向つて前進しつゝあります。先生によりて如來の親心を知ることを得ましたのを、深く感謝致します。南無阿彌陀佛。

信仰書簡

謹啓私事人生問題に付き、多年煩悶を重ね居候處、別紙感想錄の通り恩師の御著述により、大慰安を與へられ、御蔭を以て只今にては、悅んで、佛敎を謹聽する樣に相成、御著信仰の餘瀝懺悔錄幷に求道をも御配送を願ひ居り、又先日御出版に相成候信仰問題も、近頃二回通讀仕り候處、疑義とする諸問題は御熱誠なる御鋭筆に依り、一層明解を得難有感謝の至りに御座候。又、社會の惡德を御慨き、忌憚なく筆誅遊ばされ下され候事最も快とする處に御座候。私事恩師に比し年齡のみは、遙に長じ居り候へども、何等の智識なく、覺悟なく候に付き、時々恩師の如き仁に謁し、善說を拜聽し、又常人にても、信仰談など交換する人を得て、聊か慰樂を求度渴仰仕居り候へども、當地に於ては常人は云ふに及ばず、僧侶すら、眞面目ならずして、斯る希望は、全然放擲するの外御座なく、實に慨嘆の至にこれあり候。就ては、先日來事に觸れ浮び出でたる感想を、時々筆記して獨り樂しみ居り候。これを一、二、寫取り貴覽に供し候。田夫野人の寢言御一瞥御燒棄なし下され度候。一應恩師の英姿に接し、御高敎を仰ぎ度久敷渴望致し居り候へ共、事情の許さゞるあり、遺憾の至りに御座候。

又當地敎界の義は、甚だ不振にして、婦人の外は、宗敎に對する、態度甚だ冷淡にしてことに、少しく文字を、解するものゝ如きは嘲弄して、妨害する風あり、私も近來佛敎に關する書物を執務の餘暇披見して獨り樂しみ居り候を、傍より愚弄妨害せられし事毎度これあり困り居り候。右はすべて、當新竹の、事實に候へども臺北に至れば、流石都會の事とて、相當の信仰家ある樣子に御座候。先日も私南三回同地本願寺別院の說敎に參會致し候處、百疊程の本堂が聽衆て、一杯に相成居候。玆に於て、同朋も少からざるを知り、聊か意を强くするに足ると存じ候。しかし其七八分は婦人にして、餘の二三分の男子と雖も、智識の低き商工多く、官吏や會社員の如きは却て見當り申さず候。私某地在住の頃、或る僧の云ふに、人として、多少信仰心あるものは、最高の智識を有するものか、又は全く無智の人かにして中間の輩に至ては、生意氣にして、度し難き代物のみなりと、慨き居り候。私考ふるに、是も一通りの事實に相違なきも、一は僧侶の不品行不誠實にして、信仰の缺乏、幷に態度の驕慢なる、說敎振の不深切なる等も、一原因ならんかと存候。私のごときも、別段の樂しみもなく、せめては、時々僧侶等世塵を脫したる仁に接し、誠實なる說敎をきゝ、又質疑したりして、幾分か不平を醫し、慰安の道を講じ度、渴望致し居候へども、何分前述の如く不眞面目にして、中には警戒して、交際せねばならぬ、人もこれあり申候。是は、生活難等の爲めに、心落付かずして、斯る情勢に至るものにあらざるやと推察致候につき、たとひ如何なる無能の輩と雖も僧たるの位置を與へ、諸人敎導の職務を授ける以上は、各本山より資格相當の体面を保つ、衣食の資丈は、支給する制度となし、安んじて、布敎一方に專念盡瘁せしむる時は、自から前述のごとき弊害を防止するを得べきかと、考へ申候。私如きは、勿論多きを、望む意思なく候へども、せめては安心して、交親の出來る眞面目なる僧侶の、來任を切望して止まざる次第に御座候。かく申せばとて現在の住職のみを、責むるにあらず、制度の弊、然らしむると存候。右の實情に御座候につき、强ち、在家人而已を攻擊するは、いさゝか、不公平の樣心得申候。本日は臺灣始政紀念祭日にて、在住人の大節とする日に御座候につき、此機により御厚禮旁々當地近況御報申上候。御一笑の榮を賜ひ候はゞ、有難存じ候。謹言。

四十五年六月十七日　　一老人

感想錄第一、信仰

四五年五月記

信仰の事實は最大最重の問題にして、他の如何なる大問題と雖も、之を超ゆべからざるか。しかしこの事或る仁者の說の如く素と理論を以て律すべきものでなく、結局內心に於て感得するまてならん、己れの如きも幼年父母の膝下に養はれたる間は、父母につれられて、時々神佛に詣で、其話をきかされ、何心なく神佛の存在を信じ、有難く思ひ居たり。稍長じて、事物の理を解するよりして、漸次此念薄らぎ來り、二十歲前後に至て、思想一變して、たゞ科學上のみを重視し、信仰を以て、皆妄想より生ずる迷信にして、素と神佛もなく、死後もなしと速斷するに至れり。爾來廿年間、生活問題其他のため信仰の事殆んど失念して居て善人の困窮惡人の繁榮を見、己れの不運を恨み、或は加藤博士の優勝劣敗、人は利己心あるのみなどの說に惑溺して、倍々悲觀に陷り、懊惱の極遂に如何なる短慮をもなしかね間敷き迄漕付たるに、三十九年某々地在勤中宿直の夜室隅に放置したる求道を取り、ほんの消閑のため讀みたるに、實に深切なる書方にして、己れ一人を訓戒するために、書かれたる樣にかんじ思はず、暗涙を催したりき。元と宗敎の事前述の通り、是迄失念して居たなれども、全然放擲したるにあらず、時々佛敎演說や、新約全書の講義なども、傍聽に出掛たるなりしも、いつも、何等得るところなく、空しく歸途に就く而已てありした、今この一小誌により、斯る深大なる印象を與へ、多年の疑問、不平、一時に氷解飛散せしめ、非常に安心を授けられしは如何なる理由てあらうか、實に不可思議なり。此雜誌は爾來數度繰返したれども、最初の樣に感動起らざりし。惟ふに佛天の冥助己れが多年生活問題等に苦しみ精神錯亂して居るを憐み玉ひ、之を導き玆に至らしめたるに、あらざるか。此書に依り疑團をとき慰を得たる內心の狀態が、自分の如き筆ては、形容出來難いが一言にして、云へば、永年暗黑界に呻吟して居たものが、一朝一道の光明に接したる如くて、此書は、實に恩師と云はねばならぬ。否全く佛陀慈悲の手引てあらう。至愚至暗なる自分の如きは、一に佛陀の敎誨を篤實なる識者に質し、其言に遵ひ、及ぶだけ安心して行きたきものと希望して居るのてある。

雜錄

處女探行の淵源

近角常觀

一

信仰は人類一般に通ずる問題である。男女たると、處女たると既婚者たるとの區別なく、人間として必ず信仰が無ければならぬ。而して如何なる時代に於ても人は信仰に入るものであつて、殊に信仰に入る動機は如何なることに依てゞも綻び來るものである。年齢から云へば、十五六歳で信仰に入る者もあり、既に幼少時代から宗教心に富みたる大器上品の者も古來尠くはない。或は六七十歳の晩年に至つて初めて發心するものもあるが、要するに信仰は老境に向ふに從つて益々圓熟するものである。

また動機の方面から觀れば、家庭に於て順當なる薫陶を受けて信仰に入るものもあり、社會上の種々なる出來事に關する疑問から入る者もある。自己の理想を高くした時に、現實と理想の調和せぬ點を發見して、竟に信仰に入る者もある、道德の見地から云へば寧ろ自己の墮落と云ふことから、蘇然信仰に飛び込む者もある。

併し特種の場合を除いて普通に信仰に入る年齢を云へば三十歳前後である。多くの求道者は二十歳から四十歳迄の間に心から信仰の道を求めるかと思ふ。また信仰上、實驗的光明に接するには、主として人生の實際生活上の問題から來るものが多い。

今是等の標準から處女と信仰と云ふ問題を捉へて見たならば、女子としては先づ結婚前の處女の大詰と、結婚後數年間の新婦人としての序幕時代が、最も信仰に入り易き時期と見なければならぬ。斯うして前提に依つて處女時代の信仰に關する注意の要點を述べて見たい。

二

前に云つた信仰の實驗的光明に接するは、通常二十歳以上であるが、夫れに逢ぶまでには少くとも幼時からの家庭の薫陶が宜しきを得てゐなければならぬ。信仰に入る動機は必ずしも道德上正しきものばかりでは無いが、理想としては幼少から宗教的教養を經た者が、順當な時期に於て實驗に這入り得るものと認めねばならぬ。故に信仰に入るまでの間には、常に理想の到達を目的とし、志操か清淨潔白にして、其行爲は溫和同情に富む事を要する。つまり信仰に入る前は律法的に亘るまでも、嚴格なる教養と清潔なる行爲を目的として宗教的生活をなし、人間以上佛といふものを中心に保持して、これを理想とし、之を標準とし、且崇敬渴仰の念を以て進むと云ふことが最も必要である。

實際的に云へば、朝夕佛前に禮拜して勤行を示すことを怠らず、夫れを怠れば食膳に就く能はずと云ふが如き嚴格なる家憲を設くることも必要である。特種の事としては寫經とか、靈場參詣とか、主として信仰上に因緣を結び置くことが必要

てある。古來より賢婦人と稱せられたるものゝ多くは、信仰深き親近者の教養に依て、信仰的に人格を作られたものが多いやうである。兎に角幼少から深く信仰的訓育を受けた者は、後の時期に至つても、一度實驗に入れば必ず圓熟し易き素質を形造るものである。殊に信仰深き家庭に於ては、後の時期を云はず、十一二歳の少女にして立派なる信仰を會得する者もある。

三

以上は、實驗の信仰に入る前の準備とも云ふべきものであるが、さて其實驗に入る時はと云へば、先づ人世の實際問題と接觸する場合に多い。

併し理想としては一身上に何等の瑕瑾をも生ぜず、人格上に損失することなくして其の境に達し度いものである。即ち人生生活上何等か不幸なる境遇に陷つて後、初めて信仰に入るのではなく、寧ろ從來の理想的律法的信仰が或る時期に於て圓熟した時、人生上には何等の缺點もなくして、只其の理想の高尚なるが爲めに、遂に實驗の光りに接すると云ふやうにありたい。

詳しく云へば、先づ理想的律法的信仰として佛陀を信ずる時は、『佛陀は本來淸淨なるもの故、信ずる我も佛陀の如く淸淨ならねばならぬ、佛陀は惡を救ふもの故、信ずる我も他を憐むべからず、佛陀は一切衆生を慈むものゆゑ、信ずる我も亦凡ての人に優しくあらねばならぬ』等と考へるのである。而して理想は幾らでも高くなる、高まれば高まる程實際に行ひ得べからざることとなる。自然理想と實際とが矛盾する、其時に至つて理想高さが爲めに自己の不完全、不眞實、不淸淨、罪惡深重なることを自覺して、佛陀の慈悲救濟に接するやうになるのである。

此罪惡の自覺を起すに就ては、實生活上に何等か悲哀なる境遇に陷らねばならぬと云ふのではない。實生活上に於ては何等の缺點なしとするも、理想の高まるに從つて普通に於ける實生活そのものに、罪惡を自覺するやうになるのである。

此等の經路に於て、處女が實生活上何等の缺點もなく、何等の瑕瑾もなく、其他何等の悲境に陷ることなくして、たゞ理想の高きが爲めに一度折れて信仰に入り、從來の理想的律法的性格を一變して、眞に謙遜溫和にして且つ自信堅固の人格を形成することが肝要である。

四

眞實の信仰に入つたる人格は、自己の罪惡を自覺して、人間としての價値を認むる事が出來るから、人として其分を知り、また眞に謙讓なる態度を取ることが出來るものである。而して此の罪惡を自覺すると同時に、自己を眞に慈愛し賜ふ佛陀の光りに接するが爲め、獨立自尊の信念も確立して、處女としても新婦人としても、その志操は堅固となり、冒すべからざる高尚なる氣品を備ふるに至るものである。

以上は理想的信仰から絶對の信仰に入る經過を示したるものである。而して此實驗は人力を以て左右する事も出來ぬから、培養的に此經驗をさせるとは不可能であるが、理想としては處女時代に於て是非この絶對の信仰に入つて人格を完成させたいものである。而して此の信仰上の立脚地から眞實の

結婚を爲すべき資格を取らねばならぬ。

元來結婚なるものには、中心から深く信ずるところが無ければならぬ。若し眞實の信任の成立せぬ以前に、理想的信任て決めるとすれば、其結婚は決して完全なものとは云へぬ。理想的信任は必ず一度は動搖されねばならぬ。動搖せずとするも、其信任は人間的愛情から來るもので決して信仰的淸淨なるものとは云へぬ。眞實に信任した結婚は、佛陀を信ずるが如き絶對の信念を以て相信じ相愛したるものであらねばならぬ。夫れてこそ永久的にして且つ眞正とも謂つべき結婚と稱すべきである。而して處女時代に於て眞の信仰に入つて結婚を定むることは最も必要なる第一義であつて、眞の信仰に入れば諸方面に向つて圓滿なる調和的の行爲をなすことを得るが故に結婚してから舅姑に對しても中心から忠實に仕へ得るのみならず、また自信ある主婦として家政を整理することが出來るのである。斯くして初めて完全に結婚を爲すの資格を得たるものと云ふべきである。世の處女たるものは其の結婚前に於て禮儀作法乃至學問藝能の上に人間人格の中心となるべき眞實の信仰を獲得するの一大準備あることを忘れてはならぬ。實に是れ人世の實生活に於ける根本問題で、處女時代に於ける生命とも謂つべき淸淨なる操行の淵源である。

《婦女界》

時報

第二回夏季求道會

七月一日より八日まで、昨年肇めたる夏季求道會の第二回を開會せり。準備少く且つ雜誌に豫告して、地方御同朋に遍く報道するの機會をさへ缺きたるにも拘らず、意外に盛大にして昨年の倍數以上の來聽者ありて、特に著しく入信者の頻々として多かりしは、眞に佛智不思議と鑽仰するの外なし。

毎朝七時勤行をなし、歎異鈔を輪讀す、早曉來集して參加するもの多くして、佛間に溢れ多く椽に滿つ。本年は春頃京都に於て中村氏より貰ひ奉りし小祖像と信卷總序の寫眞とを安置せり。八時に於て開講、講本は信卷三心釋にして禮讃の深信釋を初として大信海の御自釋に至る。即昨年の引續也。字訓釋は一字〳〵信仰の實驗を示し、三心各々の御自釋は皆入信の眞相を描かれたるもの也。言々句々皆聖人の信念活躍せざるなし。第二席は人生問題につきて信仰上の解決を與ふ。而して其後或は信仰談話會を開き各自入信の告白をなし。感涙に咽ぶもの多し。而して夕方夜會を開き、亦信仰の談話及告白を爲す。而して十時夜の勤行に參加し、蓮如上人御一代聞書を輪讀して歸宅する者多し。此如く日一日機緣純熟して入信者頗る多し。殊に五月已降石見の御同朋中村寅之丞氏、醫學講習出席の名の下に、求道學舍に來聽せられしが、六月

二日病を起し、六日入院十二日家族上京信心相續して不思議にも病持續して、六月三十日示寂せられ、七月一日開會の日、遺骨を學舍に迎へ、求道會中其遺骨を預り置きしは、不思議の宿緣と謂ふべし。之が爲に深く哀悼すると共に、之を以て益々唯佛力の廣大なる感歎せざるはなし。今年の求道會は此の如き因緣を以て初まれり。而して地方より能々上京せられしは、昨年の如く福岡縣の有田廣氏、若松の和泉鐵次郎氏、林龍三郎氏に加ふるに、同金成辨吉氏等にして、何れも學舍に宿泊せられたり。而して最終の日の如き二河白道の譬喩をきゝて忽にして入信せしもの頗る多し。而して八日は淺草別院に參集、先づ本尊及祖像を拜禮を爲し、御法主臺下特別の御恩許を以て、聖人の眞筆敎行信證を拜見せしめらる、何れも歡欣涙を注ぎ聖人に謁し奉りたる心地なり。年を渉り日を渉り、其敎誨を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ疎といひ、此見寫を得るの徒甚だ以て難し、乃至歡喜胸に滿ち渴仰肝に銘ずといふは、實に移して以て我等が聖人の眞筆に對する感想と謂つべし。猶昨年大草師在世の昔を偲びて、同師及一般同朋の追悼會を修し、茶話會を催ふし、又坂東報恩寺に詣で、祖像に拜禮し、恰も聖人所持の笈を拜して、一同退散せり。八日間出席者一々記名せざりしゆへ脫落多しと雖、署名せし分だけ擧ぐれば此の如し。

第二回夏期求道會出席人名

近角常觀　武田慧宏　長尾收一　深井惠照　高島藤作　瀧澤三郎　須藤堅正　鹿島徹嚴　佐藤浩　淸岡博見　坂口五郎　有田廣　麻生義之介　森脇忠市　福田兵五郎　鈴木弘

畑新次郎　杉村僊吉　盛田達三　布川長次郎　布川マス

增田八重　野田はま子　近角伊惠子　田中政之進　白髭又右衞門　秀島寛融　畑いゑ子　林安喜子　石川いく子　小出はや　碓井はる　宇野はつ　高橋しげ　前田卓子　菊池浩　丸茂むね　小林しづ　岡部たみ　土谷知之　角田俊雄

開定次郎　角谷八三郎　平岡明　靑樹政孝　加藤竹三郎

岩尾藝龍　河本獻藏　谷内正順　松本薫　京極逸藏　橋詰濱吉　寺田慧眼　加藤七三　藤島信太郎　野邊地慶三　仲鹽政次　葵見丸　木場了本　西本龍山　戸叶力造　木本操

笠木輔一　田中廣志　川添榮之丞　森脇富代　小林昇　辻口藤作　丸茂文子　湊八重子　岩井三子　數藤謹　姉崎そて子　宮下とき子　長尾かす子　綾部利久子　拍原安喜子

松下要子　松下鄕　淸水かつ子　村上リマ子　脇部　元子

佐々木辰子　岡田光子　莊司已亥　松本照子　松本千代子

湊鉄子　宮下淺吉　梶谷嬉喜子　瀧本つね子　小澤一　井口乘海　近角常音　竹鼻尙友　牧田平太郎　佐藤直丸　龜谷凌雲　林龍三郎　和泉鐵次郎　金成辨吉　山名はなの

近角きそ子　加藤照子　及能いそ子　及能啓子　千田てる子　松島なみ子　中村五兵衞　盛田喜祖八　莊野淸太郎

近藤時司　喜多村紀一　佐藤要人　豐田達三　井上法忠

佐藤昭　江間春子　角谷すま子　佐々木きくの　金子悅淨

佐々木國子　增野惣吾　葦原雅亮　內藤智秀　矢島ます

靑柳雁　橫矢雪子　伊藤鉦次郎　三枝あさえ　築山淸智

藤島信太郎　石川佐久太郎　吉田是照　成瀨みね子　長谷

川つか　不破鋼　近藤ゆう子　松本忠子　長谷川春美　立石仙六　小川モト　外狩顯章　松本重子　瀧本すね子　野生司敬眞　碓井半次　爪生榮枝子　志田熊七　原基　德永勝順　尼子法雷　奥田秀吉　山崎きく　古野由松　石川いく子　青山えい子　柿岡きの　佐々木のぶ　岡田ひさ子　岡田善太郎　志田春子　片野織次郎　片野つい子　松崎壽三　桑門典　最上家堂　久保護躬　堀勇吉　淺井圓四郎　森口某氏　杉浦多津子　大佛衛　福田由次郎　原薫治　寺田千里　今井せい　緒方かよ　佐藤つね　原冬子　青山家子　菊地清　種田荒次郎　内堀末松　菊田宣暢　杉本竹三郎　小玉三五一　井口柳子　鈴木花子　見澤よし　見澤ふと子　加藤花子　小倉よし子　深見やす　青柳政孝　畑眞之助　竹節はつ　盛田保三　小南英策　奈倉和嘉　小笠原德兵衛　青山達美　安富成中　近角文常　片野鐵次郎　杉野與作　深見周二郎　石垣りう　小穴宗次　栗崎賢吾　井口まさの　井口良千代　酒井きち　花井しづ　佐々木よしえ　萩野あい子

▲本年度夏期傳道日割豫定

七月三十一日八月一日　山口縣大津郡三隅村東津講習會
八月二日より五日迄四日間　山口縣美彌郡共和村講習會
同月六日　同大津郡深川村光淨寺
同　七日より十日迄四日間　同大津郡日置村西津講習會
八月十一日　福岡縣遠賀郡枝光
同　十二日。　福岡市
同　十三日　福岡縣嘉穗郡大隈町有田方
同　十四日より十六日迄山口縣豐浦郡小串講習會
同　十七日より十九日迄三日間　河内國八尾講習會
同　二十日より二十六日迄　京都
同　二十七日より卅一日迄　江州
同　九月一日より六日迄　香川縣、高松市、善通寺
同　九日より十三日迄五日間　美濃國高須講習會

求道會館建築寄附金第四回報告

（四十五年三月初より七月中旬迄）

一金五百圓也　日本橋　西澤善七殿
一金壹百六拾六圓也　福岡　土曜會殿

内譯

金拾圓也　同　吉田藤吉殿
金拾圓也　同　本浦憲藏殿
金四圓也　同　大崎房子殿
金貳圓也　同　吉田ツチ子殿
金貳圓也　同　有田政次郎殿
金壹圓也　同　無名氏殿
金拾圓也　熊本　堤トヨ子殿
金五圓也　同　鳥越リツノ子殿
金四拾五圓也　同　堤重藏殿
金五圓也　同　堤政枝子殿
金五拾圓也　同　堤治助殿
金拾圓也　福岡　同愛子殿
金參圓也　熊本　堤チノ子殿
　　笹原エイ子殿

金貳圓也　福岡　福岡スミ子殿
金五十錢也　同　松岡セイ子殿
金五十錢也　同　加治木タケ子殿
金五十錢也　同　小迫キセ子殿
金五十錢也　同　高田スム子殿
金貳圓也　同　本浦榮子殿
金壹圓五拾錢也　同　大森マサノ子殿
金壹圓五拾錢也　同　守田タキ子殿
一金壹百圓也（第二回）日本橋　加藤竹三郎殿
一金五拾圓也　小石川　藤岡勝二殿
一金五拾圓也　大森　本多辰次郎殿
一金五拾圓也　福岡　向坊新殿
　　同久五郎殿
一金五拾圓也　本郷　井上圓了殿
　　井上玄一殿
一金四拾圓也　巢鴨　金子夫人殿
一金四拾圓也　淺草　武田慧宏殿
一金四拾圓也　本郷　安藤正純殿
一金四拾圓也　巢鴨　常盤大定殿
一金四拾圓也　淺草　月見覺了殿
一金四拾圓也　安藤嶺丸殿

一金參拾圓也　京都　大草惠逸殿
一金參拾圓也　本郷　無名氏殿
一金參拾圓也　淺草　池田さわ子殿
一金貳拾圓也　福岡　金光正藏殿
一金貳拾圓也　麹町　宮下釼太郎殿
一金貳拾圓也　仙臺　阿刀田令造殿
一金貳拾圓也　福岡　藤井信次郎殿
一金貳拾圓也　麹町　岡田德子殿
一金拾五圓也　下落合　無名氏殿
一金拾五圓也　福岡　大内龍男殿
一金拾圓也　本郷　宇野はつ子殿
一金拾圓也　三河　清澤法賢殿
一金拾圓也　小石川　湊鋏子殿
一金拾圓也　福岡　大屋雄三郎殿
一金拾圓也　小石川　有馬祐政殿
一金拾圓也　小石川　寶閣善教殿
一金拾圓也　東京　高松某殿
一金拾圓也　大阪　藤井幸搥殿
一金拾圓也　愛知　田中善立殿
一金拾圓也　日本橋　森田恒一殿
一金拾圓也　神田　野田操子殿

一金拾圓也　佐渡　幅野長藏殿
一金拾圓也　本郷　川崎りか子殿
一金拾圓也　多度津　丸尾猪太郎殿
一金拾圓也　丸龜　鹽田保太郎殿
一金拾圓也　神田　塚谷しか子殿
一金拾圓也　日本橋　石井かつ子殿
一金拾圓也　京橋　別府德子殿
一金拾圓也　佐賀　西依一六殿
一金拾圓也　福岡　金光周三郎殿
一金拾圓也　府下　奈倉和嘉殿
一金五圓也　名古屋　馬場もと子殿
一金五圓也　羽前　會田太次郎殿
一金五圓也　羽前　會田宏吉殿
一金五圓也　伊豆　庄野熊五郎殿
一金五圓也　富山　飛鳥寛徹殿
一金五圓也　鹿兒島　暉峻康範殿
一金五圓也　石見　正樂寺内同朋會殿
一金五圓也　石見　中村寅之亟殿
一金五圓也　石見　劉卓夫殿
一金五圓也　愛知　無名氏殿
一金五圓也　伊藤思恭殿

一金五圓也　福井　佐々木徹照殿
一金五圓也　越前　宇佐美賢遵殿
一金五圓也　京都　安田力殿
一金五圓也　京都　丁未會殿
一金五圓也　山口　西福寺内小島東方婦人會殿
一金五圓也　福岡　坂口强三殿
一金五圓也　丸龜　鹽田勝次郎殿
一金五圓也　神田　岡田光子殿
一金五圓也　東京　原みよ子殿　原ふゆ子殿

一金五圓也　麹町　高羽千代子殿
一金五圓也　新潟　阿部玄四郎殿
一金五圓也　巢鴨　村木一郎殿
一金五圓也　福岡　福澤熊子殿
一金五圓也　品川　玉水弘殿
一金四圓五拾錢也　石見　本吉作十殿
一金參圓也　本郷　佐藤きく子殿
一金參圓也　本郷　淺野孝之殿
一金參圓也　鹿兒島　北村龍徹殿
一金參圓也　石見　財間隆觀殿
一金參圓也　富山　經國祐慶殿

一金參圓也　十勝　湯口溫雅殿
一金參圓也　本郷　井口乘海殿
一金參圓也　京都　土生重榮殿
一金參圓也　山口　池信脩省殿
一金參圓也　山口　和道實殿
一金參圓也　香川　横田純一殿
一金參圓也　香川　鹽田熊三殿
一金參圓也　芝　加藤みよ子殿
一金參圓也　長野　中村五兵衛殿
一金參圓也　大分　佐藤正雄殿
一金參圓也　巢鴨　藤井虛殿
一金貳圓也　羽前　會田千代子殿
一金貳圓也（第二回）　小石川　姉崎そで子殿
一金貳圓也　京都　藤谷智水殿
一金貳圓也　京都　猪飼法童殿
一金貳圓也　京都　堀一周惠殿
一金貳圓也　京都　久米天海殿
一金貳圓也　京都　朽木廣覺殿
一金貳圓也　京都　岩井義景殿
一金貳圓也　函館　三瓶德英殿
一金貳圓也（第一回）　長門　杉山佐七殿

一金貳圓也　東京　林あさ子殿
一金貳圓也　周防　淺海香一殿
一金貳圓也　三重　無名氏殿
一金貳圓也　山口　内田護殿
一金貳圓也　山口　矢野幹愛殿
一金貳圓也　淺草　山本とみ子殿
一金貳圓也　福岡　平嶋一技殿
一金貳圓也　香川　大西唯治郎殿
一金貳圓也　山口　歡喜講殿
一金貳圓也　東京　安富成中殿
一金貳圓也　淺草　見澤よし子殿
一金貳圓也　京橋　渡邊ゆか子殿
一金壹圓五拾五錢也　十勝　高田茂八外世名殿
一金壹圓五拾錢也　廣島　大村與作殿
一金壹圓五拾錢也　本郷　高岡はる子殿
一金壹圓五拾錢也　小石川　老泉一凡殿
一金壹圓四拾錢也　十勝　木方とう外十三名殿
一金壹圓拾錢也　山口　土屋眞一殿
一金壹圓五錢也　前橋　星竹藏殿
一金壹圓貳錢也　長野　大日方大助殿
一金壹圓貳錢也　神戸　増谷利芳殿

一金壹圓也　大隅　中村慶巖殿
一金壹圓也　佐賀　福島あき子殿
一金壹圓也　長野　月岡長治殿
一金壹圓也　長野　月岡茂作殿
一金壹圓也　石見　今田龜一殿
一金壹圓也　石見　後藤爲吉殿
一金壹圓也　名古屋　西川良造殿
一金壹圓也　越中　金岩和助殿
一金壹圓也　富山　館森力次郎殿
一金壹圓也　富山　釋永久左工門殿
一金壹圓也　富山　山本權助殿
一金壹圓也　富山　金岩和一殿
一金壹圓也　大分　佐原秀太郎殿
一金壹圓也　福岡　德永勇藏殿
一金壹圓也　十勝　三森實言殿
一金壹圓也　十勝　横山實語殿
一金壹圓也（二三回分）　廣島　無名氏殿
一金壹圓也　茨木　内山由兵衛殿
一金壹圓也　京都　小笠原謙敬殿
一金壹圓也　京都　信國賢城殿
一金壹圓也　京都　堀場種次郎殿

一金壹圓也　京都　本田學殿
一金壹圓也　香川　千葉惠薫殿
一金壹圓也　香川　佐々木友作殿
一金壹圓也　本郷　南谷カゲ殿
一金壹圓也　越後　大島寛治殿
一金壹圓也　東京　杉谷ひで子殿
一金壹圓也　島根　鹿森作太郎殿
一金壹圓也　廣島　河野誠惠殿
一金壹圓也　廣島　青木善太郎殿
一金壹圓也　廣島　藤井みつ子殿
一金壹圓也　山口　和百合子殿
一金壹圓也　山口　鷲山道枝殿
一金壹圓也　山口　村岡波子殿
一金壹圓也　富山　野中母堂殿
一金壹圓也　富山　山口誠順殿
一金壹圓也　富山　小池治郎右工門殿
一金壹圓也　富山　松久靈成殿
一金壹圓也　岩手　小田島まさ子殿
一金壹圓也　岩手　小田島五郎殿
一金壹圓也　岩手　高橋勘太郎殿
一金壹圓也　山口　田代金藏殿

一金壹圓也　千葉　無名氏殿
一金壹圓也　陸中　穆谷憲隆殿
一金壹圓也　石見　財間御家放殿

内譯

金二十五錢也　財間觀成殿
金二十五錢也　財間サヨ子殿
金二十五錢也　財間ヒサ子殿
金二十五錢也　財間チヨノ子殿

一金壹圓也　小倉　舟木熊三殿
一金七十錢也　山口　野村喜市殿
一金五十錢也　態本　益田まさ子殿
一金五十錢也　廣島　佐々木繁一殿
一金五十錢也　長野　月岡元四郎殿
一金五十錢也（第一回）　廣島　無名氏殿
一金五十錢也　富山　遠藤米藏殿
一金五十錢也　富山　西田棟十郎殿
一金五十錢也　富山　釋永孫吉殿
一金五十錢也　富山　松井市兵衛殿
一金五十錢也　富山　釋永源次郎殿
一金五十錢也　十勝　北龍靈賢殿
一金五十錢也　十勝　小松常吉殿
一金五十錢也　島根　竹下榮吉殿

一金五十錢也　廣島　河野千里子殿
一金五十錢也　廣島　平瀨兵一殿
一金五十錢也　廣島　釋名眞月殿
一金五十錢也　山口　中原蓬子殿
一金五十錢也　山口　宮國信夫殿
一金五十錢也　山口　杉原正善殿
一金五十錢也　富山　地元久次郎殿
一金五十錢也　富山　織田平三郎殿
一金九十錢也　陸中　鈴木嘉藏殿
一金五十錢也　山口　岡野秀一殿
一金四十錢也　富山　館森庄次郎殿
一金四十錢也　廣島　河野道子殿
一金四十錢也　岩手　小田島惠吉殿
一金四十錢也　岩手　小田島孤舟殿
一金三十五錢也　十勝　湯口郁子殿
一金三十錢也　廣島　釋名諦音殿
一金三十錢也　山口　安永清市殿
一金三十錢也　富山　山田幸次郎殿
一金二十錢也　富山　山元石次郎殿
一金二十錢也　富山　館森與作殿
一金二十錢也　富山　釋永德三郎殿
一金二十錢也　十勝　大槌とく子殿
一金二十錢也　新潟　高橋勇精殿
一金十五錢也　富山　米谷龜次郎殿

小計金壹千八百九拾圓八拾四錢也

累計金九千四百六拾四圓參拾錢也

右之通リ二候也

明治四十五年七月廿日

世話人總代　長尾收一
會計監督　西澤善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀

清澤滿之師序　近角常觀著

信仰之餘瀝

第十二版

定價　卅錢
郵稅　四錢
袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の黑暗界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歲の迷雲一時に消散したる時。自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら內心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絕ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を緣として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり、而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に增補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附錄として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

信仰之餘瀝要略

第三版

部數に應じ充分割引す

定價　五錢
郵稅　二錢
但し三冊郵稅二錢
施本用冊子

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に、『信仰之餘瀝』中の眼目「宗敎的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

右二書久しく品切の處本月末出來す。

發行所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六六九六番　求道發行所

近角常觀著

信仰問題

第六版　菊版二百頁以上　代價一冊六拾五錢　郵税六錢

如何にして信仰を得可きかとは、現時青年の叫にして、如何なる信仰を以て社會を經營すへきかとは二十世紀の問題也、本書内篇は前の疑問に答へたるものにして、外篇は後の疑問に答へたるもの也

内篇には内的實驗の主義に立ちて現時紛糾亂雜せる哲學、倫理、等の關係に向て直截簡潔なる判斷を下し、宗教の眞髓を攫み來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を敍するに至りて慈光春風の世界に遊びて攝取の清懷に悟融するの想あらしむ。外篇は社會の病源に向て根本的の救濟を施こし、理想の淨國を世に實現せんとする者、歐米各國の宗教界及び社會事業を紹介し、飜て佛教原初の眞精神を說き、將來清新にして且つ健全なる社會的經營を鼓舞し來る、緇く者をして感激奮起せしむるものあり。本書卷首に米國シカゴ青年會館、英國兩院及ウエストミンスター寺院、獨逸ルーテルの聖書飜譯室、佛國宗教歷史大會の寫眞石版圖を掲け、附錄として著者洋行中の通信及び旅行記を收む趣味津々聊か讀者を慰むるに足らむか。

懺悔錄 附錄『歎異鈔』

第七版　定價二十錢　郵税貳錢　袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき、從來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に欝積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黑闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず

發行所　本郷區春木町三丁目廿一番地　東京　森江書店

申込所　本郷區森川町一番地　東京　求道發行所

近角常觀編著書目

人生と信仰　三版　定價廿錢　郵税四錢　袖珍本

親鸞聖人の信仰　貳版　定價七十錢　郵税八錢　クロース綴

歎異鈔　冠頭　五版　定價五錢　郵税三錢　迄二冊　施本

唯信鈔文意　冠頭　新版　定價七錢　郵税二錢　迄二冊　施本用

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

近角常觀序　鈴木龍司著

入信之徑路　定價廿錢　郵税四錢

求道昨年度分合本　定價七十五錢　郵税八錢

申込所　東京市本郷區森川町一番地　振替東京一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回二十日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	郵税一冊に付五厘

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十五年七月十七日印刷
明治四十五年七月二十日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

大賣捌所　東京市神田區表神保町　東京堂

前號要目

求道

◉眞心徹到

講話

◉明了堅固究竟願　近角常觀

「無碍の意義」

告白

◉十年の同情者を失ひて永劫の同情者を得たり　井口乘海

雜錄

◉至心廻向の意義　近角常觀